

第四章 風

一 副キャプテン

平成七年九月四日付 全国高校選抜大会長崎県予選会結果報告

【試合結果】決勝戦 鶴鳴八八（前三二・後五六）ー（前二四・後二〇）四四純心

#氏	名	学年	身長	出身中学校	出場時間	得点	備考
	櫻田	綾香	三年	一六四	佐世保中里	三〇分	二 スタメン
	野添	真優美	三年	一六八	長崎市横尾	二八分	一〇 スタメン
	武藤	陽子	三年	一五五	茨城伊奈東	〇分	〇 捻挫欠場
	工藤	雅子	二年	一六〇	茨城伊奈東	三七分	十七 スタメン
	浜本	左也香	二年	一七五	長崎市緑丘	十三分	四
	肘井	茜	二年	一七五	千葉県 栄	二一分	十九 スタメン
	大滝	まゆみ	二年	一六九	茨城伊奈東	二〇分	七
	大野	慎子	二年	一六〇	佐世保中里	三九分	二〇 スタメン
	副田	裕子	一年	一五九	大村桜が原	十二分	九

【試合感想】

この大会終了をもって新体制になります。

主 将・工藤 雅子

副主将・大野 慎子

主 務・小野 恭子

以上よろしく願います。

なお、櫻田・野添・武藤の三選手とマネージャーの橋本は、十二月の全国選抜大会まで現役として活動します。野原は国体まで現役です。その他の三年生は、下級生の育成と手伝いにまわります。なお、大会終了後、一年生からマネージャー志願者が二名出ました。丹羽佐千代と奥野加奈江です。鶴鳴のバスケ部には少なくともマネージャーが四名いなければ運営できません。ですから、二名の志願者は感謝するとともに一生懸命育てていきたいと思えます。

さて、試合の内容について私の感想を述べます。なにはともあれ、これで全国大会の予選はすべて終了しました。それが県内であれ、九州ブロックであれ、「この大会で優勝しなければ全国大会に出られない」という試合は神経を使います。たとえ勝つとわかっていてもです。そういう意味でホツとしたのは私の偽らざる気持ちです。

その気持ちは私だけでなく、三年生もきつと同じだと思います。特に主将の櫻田の気の使い方ようは試合中だけでなく、通常の練習や日常生活においても大変なものです。最近の櫻田は、試合の度に不機嫌そうな顔をしています。仕事ぶりが満足できないのでしょう。周囲から見ればそれほど悪い出来でもないように見えるのですが、彼女は採点が厳しいのです。そのいらいらを解消してやるのは私の仕事です。個人のことについて報告します。

武藤は、アメリカ遠征の直前にリスフラン関節を捻挫しました。だから、アメリカ遠征でもプレイをしませんでしたが、帰国してから痛みがとれないので今回は出場させませんでした。リスフラン関節というのは足の甲にある関節です。ここの捻挫はやっぱりでなかなか痛みがとれません。そして捻挫だ

けでなく、骨折を伴っている場合があるので今日レントゲンを撮ってみます。一年生の副田は、頸骨の疲労骨折です。八月中旬から痛み始めたのでこの大会一週間前から休ませ、試合にはぶっつけ本番で出場させました。これからまたしばらく休ませます。

櫻田をはじめとする三年生は、現役として、十二月の全国選抜大会までプレイを続けるが、その間、次の世代のチームの公式戦も平行してこなしていかなければならない。一〇月中旬の長崎地区の新人戦と十一月中旬の県下新人戦がそれである。だから、毎年選抜予選が終わるとすぐ次の年度の役職を決めることにしている。

入学以来、一年以上も私の視野の中に入っていなかった慎子は、遂にナンバーツリーの座にのし上がった。慎子は、私の頭の中では六月の九州大会以来ずっとナンバーツリーの座を占め続けているから抜擢でも異例でもない人事である。が、慎子はこれを信頼や認定ととらえてはいない。慎子が本当に、「自分は監督の脳の中樞を占めて居るんだ」と自覚したのは、これから約一ヶ月後に行われた福島国体の決勝戦の前だった。慎子は、この大会の準々決勝で地元福島チームを相手に、大逆転スリーポイントを決めてチームを勝利に導いた。しかし、慎子はそのプレーで自分の存在を自覚したのではなく、決勝戦の前に雅子から言われた一言で始めて自覚したのである。

二 岡山講習

昨年二月の九州大会決勝戦で、中村学園にこども扱いされたのを契機に、筋力トレーニングの質を変えたということについては前述した。当初は、傷害が怖かったので負荷を重くした筋力そのものを向上させるトレーニングは行わず、もっぱら筋のスピードアップを狙ったトレーニングを主体に行ってきた。ところが筋力というのは筋肥大が起こらなければ向上しない。我々が行ってきたトレーニングは、神経系に作用して筋繊維動員の能率は向上させるけれども筋肉の質の向上は期待できない。そこで、選抜予選が終わってからは負荷を重くして、筋肥大を起こさせることを目的としたトレーニングに切り替えた。その筋力トレーニングを開始してから五日経過した九月の十五・十六の両日、前々から約束していた岡山県高体連主催の講習会に出かけた。

講習会のスタイルは、私が説明をしたあとに鶴鳴の選手がその見本を示し、そのあと受講者にやってみようという形式をとる。通常なら、私が意図する内容を、鶴鳴の選手がモデルとなってスムーズにやってみせるのだが、この日は新しい筋力トレーニング開始後の筋肉痛がピークに達しているから、鶴鳴の選手は普通に歩く姿でさえゼンマイ仕掛けの人形が歩いているみたいにギクシャクしていて、とてもプレイの見本を示すどころではない。

また、この講習会は講習をするだけでなく、国体前の地元チームの強化を目的として、岡山の少年女子国体チームや、地元強豪チームとも強化試合を行うことになっていて、その試合も胸を貸すどころか、鶴鳴はどの試合も勝つのがやつとという状態で、地元チームの強化には何の役にも立たなかった。特にひどかったのがシユートだ。スリーポイントもジャンプショットも打った瞬間に短いとわかる。それほど筋肉がパンパンに張ってしまっていたのである。

受講者は「今年の鶴鳴バスケットはこれまでとはスタイルも強さも違うらしいよ」という情報を得て、期待を持って集まった人たちばかりだ。ところがデモンストレーションの動きはギクシャクしているし、試合はモタモタするので地元の人たちは首をかしげ、腑に落ちない様子で成り行きを見ている。この講習会の窓口となった倉敷翠松の平松先生は、受講者の数人から「今年の鶴鳴、ほんとに強いのか?」と聞かれて、鶴鳴の筋力トレーニングの経過を説明するのに大変だったようである。講習会は何回もやっ

たことがあるが、こんな講習会は初めてだった。期待を持って集まっていた岡山の人たちには気の毒な思いをした。だから、翌年講習会の続編をやって穴埋めをすることにした。

三 医科学測定（レポート原文通り）

県立総合体育館のスポーツ科学課発行の紀要に、鶴鳴の筋力トレーニングの詳細を述べたレポートを提出したので、具体的に、選手のパワーやスタミナがどのように変化していったかを説明しよう。

一 実態

現在の部員数は三四名である。本校には強化部という制度がある。それには四つの部が指定されている。当然、バスケットボール部もその内のひとつである。強化部は、その部に割り当てられた規定の人数の特待生を勧誘することができる。また、強化部はボールやリングネット等の消耗品を購入する予算以外に、特別強化費という名目で遠征や合宿のための予算がもらえる。

練習環境は、体育館のバスケットボールコート一面を使えるが、毎週月曜日と隔週金曜日は、バレーボール部との交替制になっていて使用できない。その日はグラウンドでトレーニングをする。トレーニング施設や設備はない。そのような環境の中で、通常は、朝七時五〇分から八時二〇分までの朝練習（シューティングのみ）と、午後四時二〇分から七時一〇分までの放課後練習を行なう。休養日は試合等がないかぎり、通常は、日曜日を月二回は完全休養に充てることにしている。平成七年度は、完全休養日が三二日、講習会や試験等で練習ができなかった日が一〇日であった。残りの三三三日が練習をした日数になるが、その中に公式試合に使われた日数の二三日と、遠征または招待試合に使われた日数の二〇日が含まれているから、純粋に練習のみに使われた日数は二八〇日ということになる。

二 練習に対する考え方

バスケットボールのゲームの様相を理解する

基礎技術を修得する

基礎体力を高める

この優先順位は、何を重要視しているかという順位ではなく、何から先に手を付けるかという順位である。厳しい勝負に勝つためには、体力がもっとも重要なので、
を早く仕上げて 手が回るようなチームにならなければ、全国大会での上位入賞は狙えない。

三 体力トレーニングの取り入れ方

私が採用しているトレーニングメニューは、二種類に分けられる。ひとつは体育館で練習ができない月曜日と金曜日に、定期的に行なうグラウンドでのトレーニングである。その内容は次のとおりである。

五千メートルタイムトライアル一本……………終了後二〇分の休憩を取る

四百メートルダッシュ五本（間の休憩は二分）……………終了後二〇分の休憩を取る

百メートルダッシュ一〇本……………百メートルダッシュと百メートルジョック繰り返し

もうひとつは、通常練習の中に織り込む筋力トレーニングである。内容は、体幹支持筋・上肢筋・大腿筋の訓練を主体としたものである。負荷は、鉄アレイ等の小さな器具は全員に持たせて行なうが、重量負荷は選手同士の体重を利用するが多い。方法は、一斉に時間を合わせて行なうから、負荷や回数が個人に適切でない場合があるかもしれない。しかしそれは、バスケットボールそのものの練習の流れをスムーズに行なわせることを主体としているからやむを得ないことだと思っている。

体力トレーニングを通常の練習時間以外に設けるとか、通常の練習の中でもっと増やすという考えはない。その第一の理由は、バスケットボールは複雑な競技なので、場面の理解や、多様な技術の修得に

時間を割く割合が多いからである。第二の理由は、バスケットボールの練習内容には、筋力や、心肺機能を高める要素を含んだものが多いからである。

四 体力総合診断データの活用 データの保存

医学測定項目はすべてパソコンに入力して保存している。もちろん、練習のデータも同様に保存している。データの内容は、シュート率・五千メートルタイムトライアルの記録・体重の変化等である。試合のデータはまた別に保存しているが、これは内容が多岐にわたる。

統計処理

保存しているデータは、実数を表示するか、またはグラフ化して、チームとしての推移・個人としての推移・他の選手や他のチームとの比較・チーム内での比較等様々な形式で選手に提示している。

目標の設定

医学測定項目については、明確に目標値が数値として示されるものもあるが、内容の性質上、数値を示しにくいものもある。いずれにしろ、選手達は、測定度にスポーツ科学課の指導主事から丁寧な説明を受け、個人として、或いはチームとして強化しなければならぬ部分や、充分強化されている部分をしっかり把握して練習に臨んでいる。

チーム独自のデータについては、定期的にチェックできるので明確な目標を掲げている。シュート率ではフリースローが八〇%以上、ジャンプシュートは七〇%以上、スリーポイントは六〇%以上を基準にしており、五千メートルタイムトライアルは、二分を切ることを目標にしている。また、新入生は体重の変化に注意させるが、体重が減少しても皮下脂肪が減らなければ意味がないので、しばしばキャリパーで皮下脂肪を測定し、選手の意識づけをしている。皮下脂肪の目標値は二〇%未満である。表一は、各年度の主力選手五人の平均値を年度毎に比較したものである。平成七年度の選手は二回測定しているので7Aと7Bに区別した。

データ活用の実際

a スピード

表一で示されているように、鶴鳴高校のバスケットボール部は、スタミナの指標であるVO2MAXの値が毎年高い。これは、バスケットボール部が主体となつて出場する駅伝大会で、毎年上位入賞していることでも証明されている。このようにVO2MAXの値が毎年高いというのは、バスケットボール選手にとって重要な基礎体力は、スタミナだという私自身の考えに基づいて、グラウンドでのインターバルトレーニングを継続的に行ってきたからだと思っている。しかし、そのような私の考えも、平成七年二月十九日の体力診断のオリエンテーション以後変わった。

体力診断の直前に行なわれた九州大会の決勝戦で、鶴鳴は中村学園と対戦した。目立ったのは両チームの体格の差だった。体格で圧倒的に勝る中村学園に、鶴鳴のスタミナは何

表1 主力5選手の各測定項目別平均値

測定日	年度	身長 cm	体重 kg	瞬発力A W (kg)	筋持久力 W (kg)	VO2MAX ml/分(kg)
92.01.15	H3	171	62.0	673(10.8)	*	3592(57.9)
93.01.10	H4	166	58.2	653(11.2)	*	3264(56.0)
94.10.10	H6	165	54.6	587(10.7)	*	3104(56.8)
95.02.19	H7a	166	52.8	664(12.6)	446(8.4)	2950(55.9)
95.09.10	H7b	167	53.4	729(13.7)	448(8.4)	3057(57.2)
96.01.21	H8	165	54.9	757(13.7)	457(8.3)	3108(56.6)

片カッコの中の数値は体重当たりの数値。

平成7年度は2回測定したのでH7aとH7bで示した

表2 平成7年度 体重変化および脂肪率変化記録表

選手	身長 cm	2月体重 kg	9月体重 kg	1月体重 kg	2月脂肪 %	9月脂肪 %	1月脂肪 %	備考
3A	164	51.8	52.1	*	12.2	13.3	*	ｽﾀﾐﾝ
3B	168	53.6	56.9	*	13.1	14.3	*	ｽﾀﾐﾝ
3C	156	53.0	53.7	*	17.9	20.1	*	
2F	160	48.5	50.6	50.5	15.3	16.2	14.8	ｽﾀﾐﾝ
2G	160	49.5	50.0	50.9	12.9	11.9	10.9	ｽﾀﾐﾝ
2H	175	59.1	59.1	61.1	16.8	17.5	16.1	ｽﾀﾐﾝ
2I	175	60.4	60.1	61.7	17.4	18.7	17.7	
2J	170	55.5	55.6	57.1	13.8	14.9	13.8	
1K	159		52.6	55.1		14.9	14.3	
1L	166		*	58.4		*	22.1	
1M	170		65.5	65.0		30.4	24.0	
1N	172		64.5	63.0		20.1	16.8	
1O	166		58.5	59.1		20.3	17.3	

の役にも立たなかった。みじめな敗北を味わった後、私は、このように体格差がある相手と互角に戦うには、四〇分間動き回るスタミナではなく、相手を瞬時に振り切る瞬発力を身につけるか、または相手とぶつかってもはじきとばされない筋力を身につけなければならぬということを感じた。そしてそのことは、前述のオリエンテーションで見事に指摘されたのである。

私は、相手を振り切る瞬発力と、相手にはじきとばされない筋力と、どちらを優先して強化すべきか迷ったが、いろいろ考えたあげく、瞬発力を高める方を選んだ。その理由は、筋力アップのトレーニングは、負荷を重くしなければならぬから、その重い負荷が、筋肉や関節の傷害を発生させるのではないかと恐れたからである。そのような考えのもとに、体力診断の翌日から私は、体育館での通常練習の中に挿入する筋力トレーニングのメニューを、すべて瞬発力を高めるための内容に切り換えた。内容は次のとおりである。

- ・アンクルパッドをつけたもも挙げ……………主として脚筋と大腰筋、腸腰筋の瞬発力を高める。
- ・帯状のゴムを負荷にしたレッグカール……………主としてハムストリングスの瞬発力を高める。
- ・鉄アレイを使ったプッシュアップ……………主として上腕三頭筋や三角筋の瞬発力を高める。
- ・ストロングバーを使ったバタフライ……………大胸筋や前腕屈筋群、上腕二頭筋の瞬発力を高める。

いずれも軽い負荷で、七秒間全力で動かした後に十四秒の休息を入れる。それを五回繰り返す。それ一日の練習の中に二セット組み込んだ。これは、二月二〇日から開始し、九月一〇日の測定までの間に一〇一回実施した。

実施に当たったの具体的な目標は、全国優勝した平成三年度のチームのデータに置いた。瞬発力について、H7AとH3を比較すると、筋肉の質はH7Aの方がH3よりも上回っている。それは、瞬発力Aの体重割りの項目に示されている。しかし総出力は、体重に差があるのでひとり当たり約九ワットH3が上回っている。筋肉の質はよくても、チームとしての力は総出力で表されるのだから、H7AのチームはH3にはかなわないのである。そこで、体格の差は縮まらないが筋肉の質を高めることにし、脚筋の総出力が、とりあえずH3の総出力に追いつくことを目標に訓練を行なった。

一〇一回の訓練後のデータがH7Bである。訓練の結果、H7BはH3に比べて平均身長で四・五センチ、平均体重で八・六キロ劣っているにもかかわらず、脚筋の瞬発力の総出力は、ひとり当たり九ワットの差を縮めただけでなく、逆転して五六ワットもの差をつけてしまった。これは、高さと幅を利用したゴール近辺のプレイではH3が有利かもしれないが、スピードでははるかにH7Bが上回っていることを表している。ということは、身体的能力だけに言えば、H7Bのチームは全国レベルに到達したのではないかと想像することができる。それは、この測定の一ヶ月後に行なわれた福島国体で、鶴鳴主体の長崎少年女子チームが準優勝したことで証明することができた。

なお、九月一〇日の測定後は、筋の瞬発力を高める訓練は休止し、負荷を重くした筋力アップトレーニングに切り替えた。瞬発力を高める訓練は、筋肥大が起こって筋力そのものが向上しなければ、それ以上の向上が期待できないと指摘されたからである。それは、二月十二日現在で六八回を数えた。

スピードトレーニング継続後の医科学測定が九月一〇日。その直後から負荷を重くした筋力トレーニングを開始し、そのための筋肉痛がピークの状態で岡山講習。その後、国体・地区新人・駅伝大会・県下新人戦・全国選抜大会・九州春季選手権長崎県予選を消化し、二月中旬にこのレポートは提出されている。その中の駅伝大会とトレーニング結果について少し詳しく述べよう。

まず駅伝大会だ。駅伝大会は、毎年バスケットボール部が主力となつて参加していることをすでに述べた。そして、常に上位に食い込み、特に前年度は、五位というすばらしい成果を収めたということも前に述べた。しかし、翌年はまったく同じメンバーで参加したにもかかわらず、前年とは大違いで、結

果は十七位と惨たんたるものだった。これは明らかに筋力トレーニング後遺症である。トレーニング効果を機器で測定して数値化し、それを比較することによって検討したことは何回もある。しかし競技の成績そのものに、トレーニング結果がこれほど如実に現れたのは今回が初めてである。

次に述べるのがトレーニングの結果についてである。文中にも示したように、体格では圧倒的に劣るのに、結果的に総出力では、平成七年度のチームは平成三年度のインターハイ優勝チームを上回っている。わかりやすい例を出すと、排気量二千CCで、インタークーラー付きターボエンジンのクルマに、スタートダッシュも、登坂力も優る六六〇CCの軽四輪自動車ができあがったことになる。では、誰でも訓練すればそこまで行き着くかというそうではない。トレーニングの成果というのは、器具が整っていて、正しいトレーニング理論に基づいて、能率的に行えば成果が出るというものではなく、選手の意志が何よりも重要なのである。その代表的な例が慎子だ。彼女は、折りを見ては腕に力こぶをつくって雅子や大滝や肘井と互いに比べ合い、自慢しあっていた。「思い」が強すぎて自分だけが先行し、ミスを頻発して出番を少なくしていた慎子の「思い」が、今ではチームに蔓延し、次々と記録を塗り替えるようになっていたのである。他の条件がすべて完璧にそろっていたとしても、「思い」が欠けていれば何ひとつそろっていないことに等しい。それを私はこの風軍団から学んだ。

四 ふくしま

アメリカ遠征で自信を取り戻した後の最初の全国大会はふくしま国体だった。私は、試合案内の文書の最後に次のようなコメントを書いた。「ふくしま国体で、またインターハイのようなことが起きたら、私はもう長崎に帰りません。ふくしまからそのままアメリカに亡命します」これは、「亡命」が本心ではなく、自信の裏返しである。自信とは、優勝するとか、決勝まで必ず進むというような結果のことではなく、選手の動きや精神状態のことである。このふくしま国体は、慎子の心の中でもおおきな変化が起きた。私はこの時、慎子の心の中にどんな変化が起きたのか、当時は全然知らない。

九月上旬、次年度のスタッフ発表の時に、私は慎子を副キャプテンに指名した。ナンバーツーである。しかし慎子は、その時「私はもう認められた」とは思っていない。私の中では、この国体からさかのほること四ヶ月前の九州大会で、すでに慎子は絶対不可欠の選手だという位置づけが確定し、その後はそのような意図のもとに慎子を使ってきたはずなのに、ナンバーツーが軽いポジションではないとわかっているはずなのに、それでも慎子は、「認められた」とは思っていない。

慎子が渡米した後、私は慎子と四回会っている。最初が一九九八年の夏、チームを連れてエバンスビル大学を訪問した時だ。二回目が翌年の二月に慎子の試合を見るために私が渡米した時。三回目がその年の五月に慎子が二年二ヶ月ぶりの里帰りをした時。四回目がその年の八月にチームを連れてウイスコンシン大学を訪問した時である。話したいことはたくさんあるのだが、慎子が忙しすぎていつ会ってもゆっくり落ち着いて話す暇がない。そんなわけで、私が慎子の本音を初めて聞いたのも、四回目のウイスコンシン大学訪問の時であった。

「私が、チームにとって重要な存在になっていると本当に思ったのは、ふくしま国体の決勝です」慎子はそう言った。私は、ふくしま国体の決勝戦を前にして、キャプテンの雅子に次のように言った。「慎子をスタメンで起用した方が強いというのはわかっている。しかし、この決勝戦だけはリー（武藤）をスタメンで出してやりたいんだ。あいつはずっと足の故障で戦列から離れ、縁の下の力を引き受ける役目ばかり背負ってきた。だから、この晴れの舞台では、公式スコアシートにスタメンの印を刻んでやりたい。危なくなったらすぐ慎子を出すから、なんとか持ちこたえてくれ」

私は、慎子にこのことばを伝えてくれと雅子に頼んだわけでもないし、頼むつもりはまったくなかった。現実には、大事な決勝戦の滑り出しがもたもたするかも知れないので、その意図をポイントガードの雅子にはあらかじめ伝えておくべきだと思って、そう伝えただけである。雅子は、私から言われたそのことばを慎子に伝えた。六月の九州大会の決勝戦の活躍でも、ふくしま国体の準々決勝の大活躍でもなく、雅子から伝えられた私の一言で、慎子は初めて、自分がクレインズの中核に居ることを自覚したのである。

平成七年一〇月二三日付 ふくしま国体結果報告

【試合結果】一回戦 不戦勝

二回戦	長崎七五(前三〇・後四五)ー(前三〇・後二九) 五九滋賀
三回戦	長崎六七(前二九・後三八)ー(前二五・後三三) 五八愛媛
四回戦	長崎六八(前三六・後三二)ー(前三六・後三二) 六七福島
準決勝	長崎八五(前四六・後三九)ー(前二五・後二九) 五四北海道
決勝戦	愛知九九(前四六・後五三)ー(前三六・後四一) 七七長崎

#氏名	学年	身長	出身中学校	三戦時 得点	四戦時 得点	準決勝時 得点	決勝時 得点
櫻田 鶴三	一六四	佐世保中里	三二分	六二分	三十三分	二二分	三二分
野添 鶴三	一六八	長崎市横尾	三〇分	六三分	三十七分	三十三分	一〇三分
武藤 鶴三	一五五	茨城伊奈東	十三分	二分	三十三分	十七分	八十四分
川上 純三	一六〇	島原西有家	三分	〇分	十三分	五十分	八分
石橋 純三	一六〇	島原西有家	一分	〇分	四分	〇分	*分
工藤 鶴二	一六〇	茨城伊奈東	三三分	十三分	三十四分	一〇分	三十四分
浜本 鶴二	一七五	長崎市緑丘	*分	*分	*分	一分	〇分
肘井 鶴二	一七五	千葉県栄	三七分	二一分	四〇分	十六分	三十七分
大滝 鶴二	一六九	茨城伊奈東	十八分	四二分	三十三分	三十八分	八分
大野 鶴二	一六〇	佐世保中里	三三分	十五分	三十八分	十一分	三十三分

【試合感想】

総合閉会式終了後、長崎新聞の城記者が「先生、凱旋は何日の何時ですか?」と尋ねました。私が、「凱旋って言うていいのかい? 準優勝だよ」と言うと、彼は語気を強めて、「立派な凱旋ですよ、先生」と言ってくれました。このことば、すなおに受け取りたいと思います。ほんとうに嬉しいのです。

なにが嬉しいのかというと、決勝進出ができたことよりも、彼女らの戦いぶりが嬉しいのです。ウオームアップを見ているかぎり、どこにでもいるような選手たちが、試合になると精神も肉体も常にぎりぎりの限界まで持ちこたえて、ひとつひとつ勝ち上がって行きました。そのすばらしさを城記者は讚え、観戦した多くの人々の気持ちを、「凱旋」ということばで代弁してくれたのだと思います。

確かに、日を追うごとに長崎の試合会場には見学者が増えてきました。そして、「パスが速い」「すごいディフェンスだ」「よく粘るねえ」等々、驚嘆の声が毎回聞かれました。そして決まって、「どんな練習をしたんですか?」と聞かれました。私は答えました。「普通の練習です。練習量が多いわけでもなく、血を吐くような猛練習でもありません。誰もができる当たり前のことを丁寧にやっただけです。例えばパスは強とか、パスした後は必ず動くとか、ピックアップは少しでも早く、というようなことをです」

「暮れの選抜大会に向けての抱負は?」と聞かれます。しかし、それも今までと何も変わりません。インターハイの一回戦で負けたのも、今回のような成果を挙げたのも、どちらもこのチームの真の姿で

すから。というのは、このチームは体位に恵まれないから余裕がなく、常にエンジン全開で臨まなければなりません。そういうチームは、ちよつとしたタイミングのずれで、このような両極端の結果が出るのです。だから怖いです。なぜなら、選手交替や、タイムアウトや、作戦変更のタイミングを、私がちよつとも間違えば、選手の努力をふいにしてしまうかもしれないからです。

さて、試合を振り返ってみましょう。不戦勝のあとの初戦。相手は滋賀選抜チーム。肘井が舞い上がってしまつて前半アツという間に四反則。そして後半スタート直後に五反則退場。それが伝染してしまひ、全員まつたくちくはぐなプレイばかりで思い出したくもない試合でした。

三回戦の相手は新居浜商業主体の愛媛選抜。今春、丹原高校に転動した瀬良監督が、国体ということ、古巣新居浜商業の選手を中心にしたチームの采配をふるいます。新居浜商業のエースだった石川選手が、甲子園学院に転校してしまい、戦力はダウンしているものの、瀬良色がしっかり出た好チーム。さすがインターハイ三位だけのことはあります。勝敗を分けたヤマは前半残り二分。疲れから動きの悪くなつた櫻田に替わつて出場した武藤が、起死回生のジャンプショットを決めた場面でした。これはじりじりと追い上げてきて、「ひよつとしたら逆転できるかもしれない」と思っていた愛媛の希望を断ち切る絶好のタイミングだったので、一〇点にも相当する価値がありました。骨折が完治しないままの武藤は、出場時間が短かつたのですが、今大会ほんとうに要所でつないでくれました。

準々決勝の福島選抜戦は、ダブルヘッダーの二試合目。愛媛戦の反動で動きに鋭さがありません。これまで関東遠征で何度も対戦しており、一度も負けたことがない相手ですが、今回は、前半の途中で少し点差を開けたものの、その後はじりじり追いつかれ、前半終了間際に同点に追いつかれてからは終始福島ペース。勝負は最後までもつれ込みました。残り一分で四点リードされての長崎の攻撃。ここで味方同士がからまつてパスミス。それを拾つて福島がノーマークのドリブルシュート。私は「終わった」と思いました。

ところが、ここで神様が長崎に味方してくれたのです。そのシュートがクルツとリングをなめて落ちたのです。それを拾つた長崎は逆速攻を仕掛け、櫻田がドライブで決めて二点差。残り四九秒。福島タイムアウト。私と選手の意見は一致しました。オールコートディフェンスは危険です。ハーフコートのマンツーマンでしっかり守り、次の攻撃に勝負をかけることにしました。相手が三〇秒かけてシュートしても、それを失敗して長崎がボールを取れば、まだ十九秒残っています。一回の攻撃を仕掛けるには充分の時間です。「ボールを得たら二点シュートでも三点シュートでもいい。チャンスがあつたら誰でもいいから行け！」私はそう指示を出しました。

選手は冷静でした。その作戦を見事に遂行。福島がシュートミスしたりバウンドボールを工藤が取つてドリブルで運び、フロントコートに入った時が残り十一秒。工藤、ドライブと見せて野添にパス。野添、そのボールを受けてドライブ。福島、ふたりがかりで阻止。そこで野添は、ベースラインからコーナーに回り込んだ大野へパス。その時残り六秒。大野、迷わずスリーポイントシュート。相手のブロック間に合わず。ボールはグルツとリングの縁を半周散歩し、ストーンと入りました。私は、気がついたらコートの外に向かって走り出していました。

新聞には、山崎監督が泣いたと書いてありましたが、あれはおしぼりで顔を拭いたのです。しかし、残り四九秒の、選手たちの冷静さに感動したのは事実です。シュートを決めたのは大野ですが、あの場面、これほど冷静になれた全員が、私はヒーローだと思えます。

準決勝の相手は、シュート力とスピードで福岡選抜を圧倒した北海道選抜。しかし、長崎はそれを上回りました。この試合は見事でした。この試合のヒーローは助っ人組でした。連戦の疲れで、櫻田・工藤・大野のスピードが鈍つてきた前半十三分過ぎ、私は、川上（純心）・武藤・石橋（純心）を投入し

てスタメンの三人を休養させました。ここで口火を切ったのが川上。彼女のスリーポイントを皮切りに、外角の選手が入れ替わり立ち替わり、一気に六連続スリーポイントを決めたのです。ここで北海道は戦意喪失。前半で勝負がついてしまいました。

決勝戦の相手は愛知選抜。多くの人から「どうですか」と聞かれるのですが、答えようがありません。私は、「曙に智の花が挑戦するよつなものですよ」と言って笑い飛ばしました。選手には、「終わった時に、観客から拍手をもらえるような試合をしような。それも、同情の拍手ではなく、感動の拍手をな」と言って試合に臨みました。確かに、曙に智の花が挑戦するような試合でしたが、立ち上がり三秒で、「ただいまの決まり手は突き出し、突き出して曙の勝ち」ではありませんでした。立ち上がったとたん前みつをがっちり取り、相手をいなし、けたぐりでぐらつかせ、勝負を長引かせました。しかし、体力の消耗とともに土俵際に追いつめられ、寄り切られてしまいました。大相撲ならば、懸賞ののぼりが土俵を二周ぐらいたったのではないかと思うくらい、関係者が興味をもって観戦してくれました。試合終了後、たくさん拍手をもらいました。負けてもさわやかでした。

追伸

亡命する時に必要なのでパスポートを持って行きましたが初日で不要になりました。

【選手へのメッセージ】―二回戦―

「……」

【選手へのメッセージ】―三回戦―

いい試合だった。みんなよく粘った。バスケットをよく知っている人は、きっと両チームを誉めてくれると思うよ。

【選手へのメッセージ】―四回戦―

劇的な幕切れだった。私にとっても生涯に二度とないような勝ち方だと思う。見ていた人たちも感動しただろう。しかし、試合内容は昨日の方が圧倒的によかった。どんな状況でも、平常心を失わないようにしたいものだ。

【選手へのメッセージ】―準決勝―

愛媛との試合に劣らないすばらしいできだった。特にエルは、一回戦のぶざまな試合ぶりからすると格段の成長だ。

【選手へのメッセージ】―決勝戦―

何もいうことない。みんなすこいよ。

長崎に帰るとキャシーベネットからFAXが届いていた。

親愛なる鶴鳴高校の皆様へ

鶴鳴バスケットの大ファンとして、みなさんの偉大な業績を心からお祝い申し上げます。あなた方はバスケットボールという競技で、もつとも高いレベルの成功を成し遂げました。あなた方は、鶴鳴を支える多くの人々から賞賛を受けています。もちろん私もその中の一人です。

なぜ、またどうして、あなた方がこのようなすばらしい成果を収められたのか、私は知っています。それは、ひとつにはあなた方の偉大なコーチのおかげです。コーチ山崎の、「選手は、チームの一員として何をなすべきか」ということを、選手に教える能力によるものです。もうひとつは、あなた方自身によるものです。コーチ山崎の教えである、自分中心にならず、常にチームのことを最優先に考え、どんな時でも情熱と追求心をもって臨むこと、それを実践したからです。こんなことばがあります。

ある人は「こんなことが起きればいいなあ」と思います。

ある人は「こんなことを起こしたい」と願います。

ある人は「起きればいいなあ」と思うことを、自らの努力で叶えます。

あなた方の追求心は、自らの努力で、「起こればいい」ことを叶えてしまいました。

もつひとつ、あなた方に伝えたいことがあります。長い人生の中で、目にとまることはたくさんあります。しかし、心に響くことはほんの少ししかありません。そして、心に響くことは待っていてもやって来ません。自分の心のあり方がそれを引き寄せるのです。今回のことは、あなた方の卓越した追求心がこのような形で、心に残るべきこととして実を結んだのだと思います。

最後にもう一度、あなた方の偉業を心からお祝い申し上げます。

あなた方のバスケットボールの友 キヤシー ベネット

五 残留組

「今度こそ暴れてやるぞ」とは思っていたが、決勝進出だとか優勝だとか、具体的な目標を明確に定めていたわけではない。決勝進出は、どちらかといえば、「思いがけず」と言った方がいいだろう。思いがけず勝ち進んだので宿泊日数が増えた上に、総合閉会式に参加しなければならなかったため、また一泊余分の宿泊となってしまい、長崎に帰る日が一日ずれ込んでしまった。

私は、沖縄と北海道以外は、どこへ行くにもマイクロバスで遠征する。国体からの帰りは、常磐道・東名高速・名阪道を通って大阪の泉大津へ、そこからは、瀬戸内海夜間航行フェリーで新門司へ、という行程になる。新門司上陸は、二二日の朝七時二〇分。その日は、長崎地区新人戦の初日である。組み合わせでは、鶴鳴は九時試合開始で五島高校と対戦することになっている。新チームの主力選手は、全員国体に参加している。残っているのはバックアップの選手たちだけだ。それでも県内ではなかなか負けない。しかし、本隊の到着が遅れるということを知った残留組の選手たちが、動揺して実力を発揮できないということは充分考えられる。私は、かつて私のアシスタントコーチをしていた、本校事務職員の新根氏に携帯電話で連絡を取り、ベンチ采配を頼んだ。高速道路が渋滞していなければ、新門司から長崎までは二時間半だ。下船と高速道路でのたつきがなければ後半には間に合う。

平成七年一〇月二三日付 長崎地区新人戦結果報告

【試合結果】 決勝戦 鶴鳴八九（前五四・後三五）ー（前二一・後二三）四四純心

#氏	名	学年	身長	出身中学校	出場時間	得点	備考
工藤	雅子	二年	一六〇	茨城伊奈東	二五分	六	スタメン
大野	慎子	二年	一六〇	佐世保中里	二五分	十六	スタメン
肘井	茜	二年	一七五	千葉県 栄	十八分	十七	スタメン
浜本左也香		二年	一七五	長崎市緑丘	七分	〇	
大滝まゆみ		二年	一六九	茨城伊奈東	二五分	十二	スタメン
岡	葵紀	二年	一六六	佐世保愛宕	十五分	七	
副田	裕子	一年	一五九	大村桜が原	二〇分	十一	スタメン
渡辺美和子		一年	一七〇	佐世保広田	十八分	六	
浦松	理恵	一年	一六七	南松浦若松	十五分	九	
三鳥	葉子	一年	一六六	佐世保愛宕	十五分	四	
松下	理香	一年	一七二	長崎小ヶ倉	十五分	一	

【試合感想】

国体の帰路、フェリーが新門司に着くのが二二日の朝七時二〇分。急いでも第一試合には間に合うかどうかかわからないので、試合のベンチ采配は、事前に電話で三根コーチに頼んでおきました。だから、第一試合は三根コーチのベンチにより、残留組の九人で戦ったわけです。

試合の様子は逐一携帯電話に報告されてきました。最初の電話は前半八分を過ぎたところでした。報告によれば、二〇対十五で負けていました。その時私たちは、高速道路の嬉野を過ぎたあたりでした。ちょっと焦って時計を見ながら、「後半に間に合うかなあ」などと考えたりしました。しかし、ハーフタイムの電話では、三四対二七と七点リードで折り返したという報告でした。それでみんな安心して、国体の会場で転倒してアキレス腱を切り、諫早の宮本外科に入院している川崎会長を見舞って、ゆっくり午後の試合に間に合うように帰りました。

この試合では、渡辺・椎山・浦松・三寫・松下の一年生に、キャリアを積んでもらうのが最大の目的でした。ところが、もっともキャリアを積ませたかった椎山が、決勝戦の前の練習中に捻挫してしまいました。初日には、私が到着する前に池田が膝を傷め、この二名は決勝戦には出させません。しかし、椎山を抜いた上記の一年生に、上級生の岡を入れただけで、決勝戦の後半十五分を戦わせたところ、この五人で戦った時間帯の得点も、三〇対二三で純心のレギュラー選手に勝っています。特に、一年生の出来は、初日と比べれば別人のようにうまくなっていました。これは大収穫です。

これからは、ひとつは暮れの選抜大会に向けて照準を合わせ、もうひとつの照準は新チームで戦う十一月の県新人戦、一月の九州春季大会長崎県二次予選、二月の九州春季選手権に合わせます。その両方に主力戦手として出場しなければならない、工藤・大野・肘井・浜本・大滝・副田は、これからちょっと忙しくなります。

六 ふたたび駅伝

平成七年十一月七日付 県下高校駅伝大会結果報告

【試合結果】 前述

【試合感想】

バスケットボール部からの出場選手は、昨年とまったく同じ四人です。しかし、タイムは昨年より二分四〇秒あまり悪くなり、順位はご覧のように大幅ダウンです。理由は、筋力トレーニングによるものと思われます。昨年までの体力トレーニングの内容は、グラウンドを走らせる心肺機能の訓練が主体でしたが、今年二月の九州大会決勝戦で中村学園に大敗した時、筋力アップの必要性を痛感したので、体力トレーニングの内容を、心肺機能の訓練から筋力トレーニングに切り替えました。

二月から九月中旬までは、負荷を軽くして行つ筋のスピード訓練を主体とし、その後負荷を重くして、筋力そのものを向上させる訓練に切り替え、それを現在も続けています。だから今年は、昨年までに比べてグラウンドで走る回数が極端に少なくなり、大会前の試走や、タイムトライアルでも、いい記録は出ませんでした。選手はほんとにがんばったのですが…。

毎年、十一月月上旬に行われる県下高校駅伝大会は、バスケット部が主体となって出場し、しかも毎年上位を占めていることは前にも述べた。この年のメンバーは、史上最高位の五位に食い込んだ昨年のメンバーとまったく同じで、櫻田・工藤・大滝・大野の四人である。他の一人は陸上部の選手だ。常識的に考えれば、昨年とまったく同じメンバーならば、確実に昨年よりも力がついているはずである。

ところが、結果は前述の報告（昨年五位、今年十七位）のとおり、惨憺たるものだった。しかしこれは、予想外の出来事だったわけではなく、事前の練習からも、試走の結果からも、充分予想できたこと

である。この頃は、負荷を重くした筋力トレーニングを始めてからまだ約二ヶ月しか経過していないので、身体の内面でどのような変化が起きているのかはわからない。が、前述の「医学測定」でも報告したように、翌年一月の医学測定時には、体重あたりのパワーはもちろん、総出力でも平成三年のチームを上回ってしまうことになる。だから、この駅伝の頃には、身体が駅伝向きから格闘技向きに変化しつつある最中だったのだろうと推測される。

それにしても、訓練というのは、しっかりと「思い」を持って正しく継続的に行えば、これほど如実に成果が上がるものなのである。逆に考えれば、勉強不足の上に、正しくない訓練方法を、気分次第でしか行わないとすれば、しかもそうやってしていることに気付かないで、自分たちはかなり厳しい訓練を続けていると錯覚しているとすれば、その結果は悲惨なものになるだろうと推測するのは容易である。これまでのコーチ人生で、そんな時期はまったくなかったと断言できないのが怖い。

七 雨降って地固まる

平成七年十一月二日付 県下新人戦結果報告

【試合結果】 決勝戦 鶴鳴九五（前五一・後四四）ー（前二二・後十七）三九純心

#氏	名	学年	身長	出身中学校	出場時間	得点	備考
工藤	雅子	二年	一六〇	茨城伊奈東	四〇分	二〇	スタメン
大野	慎子	二年	一六〇	佐世保中里	三三分	十六	スタメン
肘井	茜	二年	一七五	千葉県 栄	三六分	三二	スタメン
浜本左也香	二年	一七五	長崎市緑丘	四分	四		
大滝まゆみ	二年	一六九	茨城伊奈東	三九分	十五		スタメン
副田	裕子	一年	一五九	大村桜が原	二八分	六	スタメン
椎山	美香	一年	一六五	西彼杵香焼	二〇分	二	

【試合感想】

大会初日に私を激怒させる出来事が発覚しました。他人から見ればたいしたことではないかもしれませんが、私にとってはがまんならないことだったので、一日目の夜は怒りがこみ上げてきて眠れませんでした。このような気持ちを抑えたままベンチするのは嫌だったので、二日目の朝、私はみんなを集めて言いました。

「昨日は、試合が終わったら、お前たちを半殺しにするほど殴ってやろうかと思った。が、一夜明けると少し気持ちも治まった。今お前たちにとって大切なことは、そのことを嘆くことではなく、『だから挽回しよう』と思って取り組むことだ。俺もそのつもりでベンチをやる」

しかし、私の剣幕に押された選手たちは、気持ちばかりが空回りします。いやなことがあっても、昔の私のように、ベンチでふてくされていたり、コート上の選手を罵倒したりはしません。やはり試合というのは、心身ともに健全な状態でなければうまくいかないものです。試合内容は、今年度最低のきでした。翌日の朝練習の時に、私は選手を集めてまた言いました。

「雨降って地固まるということわざがある。今回のことは、神様が、お前たちに自分を見直すきっかけづくりとして与えてくれたんだと思え。順調に何事もなくこのままインターカップまで進んでいったとしたら、また、インターハイみたいな後味の悪い試合を繰り返すかもしれないからな」

今年と来年のチームは、私のコーチ人生で、二度と創ることのできないチームかもしれないとは思っています。それは、理解力のある選手たちに恵まれたからです。だから今回のことも、きっと選手た

ちはチームをいい方向に向け直す材料にしてくれると思います。私自身も、ウィンターカップでは、皆様からたくさん拍手がもらえるチームに仕立て直してお目にかけていたいと思っています。

今回の試合は、一年生の査定がひとつの目的でしたが、これから伸びるかなあと思っていた浦松が、二日目の午後の試合で転倒した時に、手首を骨折してしまいました。復帰まで三ヶ月はかかるでしょう。副田と椎山は、上級生の中で揉まれながら強くなっていくと思います。渡辺、はいいセンスを持っているのですが、バスケットを理解するのにまだ時間がかかりそうです。三寫と斉藤は、自分自身を真剣にチェックすることからやり直さなければなりません。アドバイスしてやったことを、意識していない場面がたくさんあります。決勝戦では、工藤と大野が衝突し、大野の鼻が曲がりましたが私がその場で修復しました。きつと、挽回を焦って意気込みすぎたのでしよう。

【選手へのメッセージ】

雨降って地固まるだ。全てを再点検してウィンターカップに臨もう。

私は、日常生活がだらしない選手や、マナーが悪い選手は大嫌いだ。なぜなら、スポーツ選手というのは、普通のレベルから抜け出した人間、または抜け出そうと努力する人間が行うものだと思っているからである。だから私は、技術や体力の訓練よりも、人間としての訓練を徹底的に行う。個人の生い立ちによって違いがあるから、そのような私の考えを取り入れて自分のものにする期間は、個人個人で異なり、半年で一人前になる選手もいれば、卒業まで引きずる選手もいる。

報告書に登場した、「私を激怒させる出来事」というのは、眉剃り事件のことである。初日の第一試合のハーフタイムの時、ステージの上で試合を見ていた協会役員のN氏が、マネージャーの小野に、「K選手の眉、会う度に細くなってるねえ」と言ったのが私の耳に入った。小野は「シッ」と言いながら人差し指を口に当てる。私に聞こえるような恐ろしいことが起こるか知っているから、N氏のことばがそれ以上続かないように遮ったのだ。Kが近くに来た時に、さりげなく観察すると、Kの眉は確かにクワガタのひげみたいに細く刈りそろえてあった。それは、昨夜急に刈りそろえたものではない。おそらく、何日もかかって少しずつ刈りそろえたのだろう。しかし私は、毎日彼女を見ていながらその変化に気付かなかった。

当時、爆発的に人気が出てきた十代の女性歌手の眉がそんな眉で、ギャルたちは争ってその女性歌手の眉に似せようとし、それが日本全国に広がっていった。Kはもちろん、生徒指導上の問題で手がかかるような選手ではない。ただ、ちょっとだけ流行に乗っかってみたかったのだろう。

Kは学校生活でも、「Kさんは、まだこともみたいなところがありますねえ」と、担任から言われたことがある。しかし、幼稚であれ、ちょっとした出来心であれ、私はそんなことがとにかく嫌いだ。私は、苦虫をかみつぶしたような顔をして、二日目は終始機嫌が悪かった。だから選手も、それを敏感に感じ取り、ピリピリして異様な雰囲気になる。慎子が鼻を脱臼したのも、浦松が手首を骨折したのも、そのようなストレスが心身のバランスを崩して起こしたのだろうと私は思っている。

八 失速

平成八年一月八日付 ウィンターカップ結果報告

【試合結果】二回戦 中村学園五九(前二七・後三二)ー(前三一・後十八)四九鶴鳴

#氏	名	学年	身長	出身中学校	出場時間	得点	備考
----	---	----	----	-------	------	----	----

	櫻田	綾香	三年	一六四	佐世保中里	十九分	六 スタメン
--	----	----	----	-----	-------	-----	--------

	野添	真優美	三年	一六八	長崎市横尾	四〇分	九 スタメン
--	----	-----	----	-----	-------	-----	--------

武藤 陽子	三年	一五五	茨城伊奈東	十一分	四
工藤 雅子	二年	一六〇	茨城伊奈東	三七分	六 スタメン
大野 慎子	二年	一六〇	佐世保中里	三九分	二 スタメン
肘井 茜	二年	一七五	千葉県 栄	三七分	十四 スタメン
浜本左也香	二年	一七五	長崎市緑丘	三分	〇
大滝まゆみ	二年	一六九	茨城伊奈東	十四分	八

【試合感想】

二二日の夕方と二三日は、事前合宿でジャパンエナジーにお世話になりました。この合宿には、全国各地から一〇チームほど集まっていました。その中の三チームと練習試合をさせてもらいましたが、調子はよくもなく、悪くもないといった状態でした。

二三日。午前中が開会式。鶴鳴は最終試合で、夕方五時にトスアップ。待ち時間が長いので、身体が動くかどうか心配でしたが、試合前の練習が始まるとそんな心配は吹き飛びました。動きがシャープで、シユートは正確です。一回戦の試合もそのままの調子で快勝しました。翌二四日が今大会最大のヤマ場である中村学園戦です。かなり緊張して臨みましたが、選手の動きは前日同様シャープで、試合開始からずっと主導権をとってすすめることができました。ところが、前半の終わり頃から動きが悪くなり、それが後半になっても回復せず、後半の中頃逆転され、それをひっくり返すことができずに負けてしまいました。

動きが悪くなった原因は、選手交代がうまくいかなくて、休養の取らせ方が思うようにならなかったからです。鶴鳴のバスケットは、動きが激しいバスケットですから、交替やタイムアウトのタイミングを間違えば、このような結果になります。なぜ交替がうまくいかなかったのかというと、主将の櫻田のファウルトラブルで、ローテーションが狂ったからです。櫻田は、前半開始早々連続三反則でベンチに退き、後半も充分なプレイができないまま五反則退場になってしまいました。

翌日、名短が昭和学院に負け、その昭和学院が、次の日、石川の津幡に負けるといふ波乱がありました。おそらく、名短にも昭和学院にも、第三者から見ているとわからないような事情が何かあったのでしょう。トーナメントの一発勝負というのは、ほんとに難しいものです。

こうして、最後の全国大会では二回戦で姿を消してしまいました。この一年を振り返って、選手には、ほんとうに「ご苦労さま」、そして「ありがとう」と言ってやりたいと思います。思えば、今年の二月の九州大会で中村学園に九四対四九とまるでこども扱いされて負けたチームが、秋の国体には準優勝まで漕ぎ着け、さらにこの選抜大会では、優勝した中村学園にほとんど互角の勝負ができるまでに成長したのですから。

二四日に私たちの試合は終わりましたが、それから四日間、ジャパンエナジーで合宿させてもらって帰ってきました。合宿初日に、「最終日はもしかしたら決勝戦を見に行くかもしれない」と選手には言いましたが、二七日の夕方、「見に行かないで練習する。来年は見に来て貰う側になりたいから」と言いました。なぜ気持ちが変わったかというと、名短が負けたからです。誰が見ても、今年も来年も名短がどこかのチームに負けることなど想像がつかません。それが負けたのです。

「名短も負けることがあるということは、我々にも勝つチャンスはあるということだ」
本気でそう思うのは思い上がりでしょうか？

【選手へのメッセージ】

これで平成七年度が終わりました。みんなありがとう。

六月の九州大会では、中村学園に二〇点差をつけられて負けた。しかしそれから四ヶ月後の国体では、

中村学園は札幌山の手に二回戦で敗れて上位進出はならなかった。一方鶴鳴は、その札幌山の手を破って決勝進出を果たした。だから、選抜大会の二回戦で中村学園と当たることが決まった時、もう中村学園とは互角に戦えるまでに力がついているはずだと信じ込み、中村学園を破って決勝進出することだけを考えて大会に臨んだ。

報告書でも述べているとおり、それは間違いなかったというのを、初日の試合のウォームアップの時に感じた。それを狂わせたのは主将の櫻田である。櫻田は、前半の途中で立て続けに三本の反則を取られた。そのうち一本はオフエンスのチャージングである。おそらく気負いすぎたのだろう。櫻田は賢い選手である。だから私同様、初日のウォームアップの時に、「これなら国体の再現だ」と思ったに違いない。それで張り切り過ぎた。私はこの文章を、櫻田にインタビュして書いているわけではない。自分の憶測で書いている。しかし当たっていると思う。

賢い選手は「思い」が違う。普通の選手ならなんとなくやってしまうところを、賢い選手は「まだまだ」「よし」「いける!」「まずい!」など、さまざまな思いを込めてやるのである。だから、賢い選手の手をやることに偶然は少ない。思いを込めた結果そうなるのである。思いが強くなれば本当の強さは生まれて来ないが、それに若さが伴うと、思いだけが先行して技術や身体をおいてけぼりにする場合がある。思いを強調するのは痛し痒しなのである。

実は、これと全く同じことが翌年のインターハイでも起こる。犯人は慎子である。超秀才の中里中学校出身トリオの鴨川・櫻田・慎子のうちの二人に、まったく同じことが起きてしまった。賢さ故の結果である。やむを得まい。

九 追い込み

平成八年一月十六日付 九州高校春季選手権長崎県二次予選結果報告

【試合結果】 決勝戦 鶴鳴八六(前三六・後五〇)ー(前二五・後十二)三七長崎商業

#氏	名	学年	身長	出身中学校	出場時間	得点	備考
工藤	雅子	二年	一六〇	茨城伊奈東	四〇分	十七	スタメン
大野	慎子	二年	一六〇	佐世保中里	四〇分	十六	スタメン
肘井	茜	二年	一七五	千葉県 栄	四〇分	一三	スタメン
大滝	まゆみ	二年	一六九	茨城伊奈東	三九分	二	スタメン
副田	裕子	一年	一五九	大村桜が原	二二分	二	スタメン
椎山	美香	一年	一六五	西彼杵香焼	一九分	七	

【試合感想】

一月四日から七日までは、近県からの高校生や、県内の中学生が相次いで来校し、その相手をするのに終了しました。八日は、月曜日で体育館が使えない日なので、翌九日から自分たちだけの練習になります。私は、この日から練習内容をがらりと変えました。練習メニューはすべて運動量が多く、スピードを強調するものばかりです。今年度の全国大会では、トップランクのチームに善戦するだけではなく、それらのチームに勝ちたいからです。この大会は、強化練習が始まってから五日目だったので、選手の手疲労がピークに達し、動きは鈍く、正確さを欠いたプレーが続出しました。

「動きが鈍い。それは疲れが溜まっているから仕方がないんだ。だから、いつもなら成功するはずのプレーが失敗するというケースがあると思う。でもがっかりするな、あとをていねいにやれ」
「ハーftimeに私はそう言いました。」

もちろん、今回のように、疲労を残したまま来月の九州春季選手権に臨むようなことはしません。とりあえず、二月三日まではみんながんばってもらい、その後一週間は軽いメニューで調整し、疲労を抜いてから九州大会に臨みます。その後また春休みまで、選手にはひと踏ん張りしてもらおうと思っています。新しい練習が始まってから一年生への追求が厳しくなっています。一年生の中には、事態を敏感に感じない選手がたくさんいるからです。「一年生だからまだ無理さ」などと言わないでください。入学してもう一年が過ぎようとしているんです。それなのに、一向に顔つきが変わってきません。データの最後のコメント欄に、昨年の、この大会で私が言った、「勝負に挑む人間にふさわしいかどうか」ということが再び引用されていますが、そういう意味で合格点をあげられるのは、工藤・大野・浜本の三人だけです。肘井と大滝はまだまだ、一年生に至ってはまだ何もわかっていないという状態です。それを三月までに、たくましくなった鶴鳴に仕上げなければならぬのです。

【選手へのメッセージ】

昨年のこの大会は、この欄に次のように書きました。

「後半残り十四分から一〇分までの間の空白はなんですか。いつものパターンですか。まだこんな問題を抱えてもたもたしてるんですか。どうも、ぶざまさとかぶがいなさに鈍感なようですね。勝負に挑む人間というのは、他の人間と違って感覚が鋭敏でなければならないんですよ。もういちど、自分は勝負に挑む人間としてふさわしいかどうか、見直してみませんか。もしふさわしくないのなら、早めによめた方がいいですよ。私は、見に来てくれた人たちが退屈になるような試合はしたくありませんからね」。そして、この試合の一ヶ月後に行われた九州高校春季選手権では、決勝まで進んだものの、中村学園にこども扱いされて負けました。しかし、そのチームが、秋の国体では準優勝し、ウィンターカップでは、優勝した中村学園に肉薄する試合をしたのです。ぶざまだとののしられたチームが、一年後にはそこまで到達したのです。そのことを忘れないでください。

この大会が過ぎてさらに、練習内容も私の口から出ることはも一段と厳しくなった。雅子と慎子と浜本以外の上級生の意識が希薄だったことと、下級生の中には、まるで他人事のような気持ちで練習に参加している選手が多かったからである。効果はきめんに現れた。いい方向にはなく悪い方向に。まず椎山がやめた。実にあっさり。

新チームは、インサイドにステイしてパワープレーをやる攻撃方法ではなく、センター役の肘井が、周囲の選手にスクリーンをかけ、それを利用して周囲の選手が動き回るというスタイルが定着していた。だから浜本は、肘井のファウルトラブルがないかぎり出場時間がぐっと減り、足が速く、アウトサイドのシュートが不得手ではない選手が、優先的に使われる機会が多くなる。

そうなれば、上級生では、工藤・大野・肘井・大滝以外に可能性はなく、この四人以外にローテーションに加えられるのは、二年生の副田と椎山しかない。副田は一五九センチと、小柄ながらスリーポイントの安定度が抜群で、このところメキメキ上達してきた選手である。椎山は、隣の郡の中学校出身で、私がリクルートした選手ではなく、自ら志願してきた選手である。ところが、よく観察してみるとすばらしい素質を持っていた。それは彼女の瞬発力であった。コートタッシュをさせると三年生もかなわない。しかもスリーポイントが打てる。しかし彼女は、「私は監督に声をかけてもらって鶴鳴に来た選手ではない」と常に思っていた。だから、入部当初から何をやるにも消極的だった。というより、意識的に目立つまいとしているようにすら見えた。

私は、バスケット関係者の目にとまらなかつた彼女を磨きあげ、アツと言わせてやるうと思つて私の構想の中にしっかりと組み入れた。細部をチェックするとディフェンスがおそまつ過ぎる、ディフェンスは、身体的な素質よりも精神的な要素が大きく関係してくる。私はそこを改良しようとして手をつけ

た。しかし、それまで、期待されたり重責を担ったりしてきた経験のない選手が、いきなりスタメン扱いされ、しかもチームの中心選手として活躍してきた選手と同等に、ふがいなさを罵倒されたりすれば面食らうのは当たり前だ。

実に惜しいことをした。本当にがっかりした。しかし私は、椎山を追わなかった。確かにやり方が性急だったと思う。しかし、九州大会では確実に優勝し、さらに全国の上位を狙おうかというチームの、スタメンか、またはそれに近いポジションを得られるかもしれないという状況ならば、バスケットボール選手として活躍することを志願してきた選手なら、少々の辛いことはがまんできるだろう。それをあつさり捨てる選手なら、説得しても無駄かもしれないと思い、私もあつさりあきらめた。

この時私は、中村監督に、「おまえ、三〇年経っても変わらないなあ。ほんとうにしょうがないやつだ」と言われるだろうなあと思ひ、もし中村監督が長崎にいたら、こっそり私に内緒で、椎山の家を家庭訪問して、「山崎先生の本心はそうじゃないんだから…な、もう一度やれよ」と説得したに違いないと思つた。『チームを創る(改訂版)』第一章 2 がむしゃら 二五頁参照

十 大雪

平成八年二月十三日付 九州高校春季選手権大会結果報告

【試合結果】 一回戦 鶴鳴八五(前四五・後四〇)―(前三四・後三四) 六八筑紫女学園

二回戦 鶴鳴六五(前三二・後三三)―(前十八・後二四) 四二佐賀清和

準決勝 鶴鳴七五(前四七・後二八)―(前二七・後三八) 六五小林

決勝戦 鶴鳴八三(前四八・後三五)―(前三六・後四〇) 七六九州女学院

#氏名	学年	身長	一時間	二時間	二点	準時間	準点	決時間	決点	備
工藤	二年	一六〇	四〇分	一〇	三六分	九	三六分	一〇	四〇分	二〇 S
大野	二年	一六〇	四〇分	二一	三四分	八	三三分	八	四〇分	七 S
肘井	二年	一七五	三七分	三八	二七分	十九	二七分	二一	二九分	十八 S
浜本	二年	一七五	三分	〇	十三分	四	四分	四	十一分	二
大滝	二年	一六九	四〇分	六	三三分	十五	四〇分	十八	四〇分	十七 S
副田	一年	一五九	四〇分	一〇	三九分	八	三八分	十四	四〇分	十九 S
浦松	一年	一六六	〇分	〇	七分	〇	五分	〇	〇分	〇
渡辺	一年	一七一	〇分	〇	十一分	二	〇分	〇	〇分	〇

【試合感想】

予想通り、九州女学院が決勝に上がってきました。予想が外れたのは沖縄勢でした。男女とも全滅です。何年かに一度の寒波が襲来したのも理由のひとつに挙げられると思います。沖縄勢が現地を飛び立った時は気温が摂氏二〇度。それが、大会初日は摂氏四度です。しかも、開会式当日には大雪が降りました。沖縄の選手にとっては、生で体験する大雪なんかめつたにありませんから、午前中の練習は珍しい大雪が気になって集中力を欠き、練習にならなかつたそうです。先の話になりますが、今年の八月下旬に行われる九州国体は、開催地が沖縄です。真夏に沖縄でやるのですから今回とはまったく逆です。インターハイが終わったら、体育館にストープを持ち出して、トレーナーを着て練習させようと思つています(これは冗談ではありません。本気です)。

さて鶴鳴ですが、まずは二年生に、「おめでとつ」「お疲れさま」「よくやったね」と、言ってやりたいと思ひます。特に工藤には、この三つのことばを太文字で言つてやりたいです。それは、工藤が特に

活躍したからではありません。工藤の気持ちに対してなのです。工藤以下二年生は、昨年の国体とウィンターカップではよく働いてくれました。しかしそれも、安心して頼れる上級生がいたからです。今回は、その上級生が全部退いた後の初舞台。工藤にとっては、櫻田が退いた後のキャプテンとして、「みんなを引っ張って行けるだろうか」「私の判断に間違いはないだろうか」「等々、様々な思いを秘めての大会だったはず。その気持ちに対して、私は労いのことばをかけてやりたいのです。特に鶴鳴は、昨年からコート上の選手のサインによってディフェンスのチェンジングを行っています。サインを出すのは、昨年が櫻田、今年は工藤です。それを含め、きっといろんなことが工藤は心配だったに違いありません。

確かに、初戦の筑紫女学院との試合では、ゾーンプレスを長くやりすぎました。決勝戦のプレスオフエンスはおそまつでした。個人的には、肘井が決勝戦で五反則退場になってしまいました。このように、ひとつひとつ取り上げてみれば、練習では充分理解しているはずのことを判断ミスしたり、練習ではしっかりできるはずのことを失敗してしまうというような、未熟な一面が出ました。しかし、それらのほとんどが、引き継いだ後の初戦という特殊な舞台がそうさせたことで、このメンバーで、公式戦を積み重ねていけば解決できるものだとは私は思っています。

これからしばらく公式戦はありません。だから、時間をかけて強化したいことを、しっかり練習できます。そのうちのひとつは体力の強化です。昨年同様、今年も動きの激しいバスケットを展開しなければなりません。ですから、後半になっても動きの量とスピードが落ちない力をつけなければならぬのです。このことは、大会前から選手にも言っており、心からの準備はできていると思います。しばらくお休みしていた、グラウンドでのインターバルトレーニングも復活させます。

もうひとつは、バックアップ選手の強化です。このままでは主力六人の負担が大き過ぎます。もちろん、一年生にがんばってもらわなければなりません。四月からの新入生も、今年は急いで戦力化しなければなりません。

【選手へのメッセージ】――一回戦――

ハル、ゾーンプレスは長くやりすぎたね。

【選手へのメッセージ】――二回戦――

特記なし

【選手へのメッセージ】――準決勝――

一年生へひとこと言いたいことがあります。

プレイが下手な選手や、足が遅い選手は、上級生の中にもいます。でも、鶴鳴の上級生は、心の在り方だけは全国のトップレベルなんです。まだ三年生が卒業するまでに少し時間があります。少しでも多く学んでください。

【選手へのメッセージ】――決勝戦――

プレスオフエンスがおそまつすぎましたねえ。しっかりしたスペイシングの感覚と、パッシングゲームは得意中の得意なはずなんですが。でも、二年生にとっては、三年生がいなくなった後の初のビッグゲーム。いろんな思いがあったでしょうから仕方がないのかもしれないかもしれません。

十九日から二〇日にかけて、長崎は五年ぶりの大雪に見舞われた。南国長崎でクルマに乗る人たちは、雪道に対する準備もしていないし、雪道の運転にも慣れていない。だから長崎は、この二日間交通マヒ状態だった。二重追突や三重追突が相次ぎ、道路脇に落ちているクルマや、立ち往生して路上に放置されたまま、雪解けを待っているクルマなどが道路を塞いでいてどうにもならない。そんな中で九州大会は開催された。

初日の代表者会議で、沖縄の北谷高校男子監督の安里先生が注文を付けた。

「沖縄から来ると寒くてたまりません。会場に暖房は入らないんでしょうか」

議長がどう答えようかと迷っている間に私が口を挟んだ。

「おい、那覇での九州大会の時も、宮古島での九州大会の時も、沖縄の六月の猛暑の中で、冷房はなかったぞ」

会場ドツと笑いが出て、安里発言は一件落着。安里先生とは兄弟みたいに仲良くつき合わせてもらっているから私もそんな冗談をとばしたのだが、地方大会では、会場全体に冷房や暖房を入れるというのはお金がかかり過ぎて運営できないというのが現状なのだ。沖縄のこともたちは、こんな大雪を現実に見たことがない。代表者会議が終わったあと、安里先生は嘆いていた。

「選手は練習どころか、窓にへばりついて雪を見物してましたよ」

それは大げさだろうが、沖縄の選手にとって、この大雪がめずらしかったのは間違いないだろう。だから、地元での大会や、練習の時のような集中力が持続できなかったはずだ。それに加えて、かつて経験したことのないような寒さの中での試合である。沖縄の選手がすばやく動けるはずがない。試合当日、ベンチで震えている沖縄の監督さんたちに、ホットコーヒを差し入れてやったがそれぐらいでは間に合わない。沖縄勢は全滅してしまった。

十一 特訓

平成八年四月二三日付 県下高校春季選手権大会結果報告

【試合結果】 決勝戦 鶴鳴九七（前六一・後三六）ー（前二八・後二三）五一長崎商業

#氏名	学年	身長	出場時間	得点	備考
工藤	三年	一六〇	三二分	十三	スタメン
大野	三年	一六〇	三五分	二二	スタメン
肘井	三年	一七五	三三分	二五	スタメン
浜本	三年	一七五	六分	〇	
大滝	三年	一六九	三六分	二二	スタメン
副田	二年	一五九	二一分	一〇	
渡辺	二年	一七一	四分	〇	
井澤	一年	一六二	一三分	三	スタメン
森崎	一年	一六三	五分	二	
本村	二年	一六九	三分	〇	
下田	一年	一六一	二分	〇	

【試合感想】

三月一日から約三週間、大滝と副田の弱点矯正のためのメニューをとことんやりました。その結果、春休みの関東遠征でも、今回の試合でも、「大滝が安定してきましたねえ」という声を多数耳にしました。私もそれは認めます。一方副田はまだまだです。三月以降の練習でも、弱点を克服しようとする強い意志が、こちらに伝わってきませんでした。やはり、それがそのまま公式戦でも現れました。上級生と下級生の人間の差なのでしょう。

今の時点での、工藤・大野・肘井・大滝のプレイは、全国のトップレベルだと私は思います。昨年末では、工藤と大野が先行し、肘井と大滝があとからのこのこついていくという状態でしたが、大滝に先

んじて肘井が、心身ともに安定してきたことと、今回の大滝の成長で、この四人は横一線に並びました。ほんとに頼もしい限りです。残る課題はバックアップ選手の成長です。

楽しい話があります。アメリカ遠征の時に世話になったコーチベネットが、インディアナ州にあるデビジョンのチームに引き抜かれて行くことになりました。これまでは、デビジョンのチームでしたから、奨学金付きの選手募集はできませんでした。それがこれからは可能になるのです。そしてコーチベネットは、鶴鳴のナンバーワン選手なら、誰でもいいから特待生では是非欲しいとガイさんに言ったそうです。ガイさんは「キャシーは本気です」と言いました。嬉しいではありませんか。

決勝戦は危うく負けそうになった。それは終盤、九州女学院が仕掛けたオールコートゾーンプレスに引っかけたからである。元凶は大滝と副田の二人である。この二人が臆病になって、リズム・タイミング・スペイシングをことごとく狂わせてしまった。鶴鳴は、相手がゾーンで守ってきたり、プレスデイフェンスを仕掛けてくると、「しめた」と思えるくらい、ゾーンオフフェンスやプレスオフフェンスの練習を積み重ねてきている。それも、練習試合では実証済だ。

私は平成元年の夏、新入生の松尾（専修大学）・松山（エナジー）・浜口（エナジー）・山口（東京学芸大）を、急いでスタメン定着の選手に仕立て上げなければならなかったから、ランニングスルーと私が勝手に名前を付けた練習方法で、ボール運びとスペイシングとタイミングの感覚をつかむ練習を徹底的にやった。そのおかげで、九割方不可能と思われた北海道国体の出場権を得ることができた。それは、ドリブルやパッシングがうまくなったからではなく、にわか仕込みの下級生に、場面を見る目が備わったからである。以後、この練習方法は、鶴鳴独特の練習メニューとして受け継がれてきている。昨年の国体準優勝も、その強みがあったからこそその成績なのである。

昨年の試合では、大滝のブレイも、副田のブレイも、チームのブレイキになったという印象では残っていない。だからたぶん、去年は櫻田以下上級生がしっかりしていたし、同級生では雅子や慎子がしっかりしていたので、二人ともチームの一部品として気楽に動いていればよかったからなのだろうと思われる。ところが今年は、上級生が抜けたあとのチームの心臓部に当たる役割を受け持たされることになった。まだ前述の感覚を充分自分のものとして取り込んでいないという事実が暴露された上に、重圧がさらにそれを増幅させ、このような結果になったのだろう。それに加えて自覚という点でかなり立ち後れているこの二人だ。悲惨な結果になるのは当然である。

この二人の特訓とは、ボールキープ力を向上させるための練習である。オールコート二対三という練習メニューがある。二人組のボール運びを、三人の組がダブルチームの連続でつぶしていくという練習方法である。通常は、二人組の方も、三人組の方も、一セットごとにパートナーを変えろ。しかし今回は、二人の特訓が目的だから、二人組は常に大滝と副田の二人に固定して、二人をいじめ抜くのである。ふたりとも、極端にドリブルが下手だというわけではない。副田の方は、右手ドリブルしか使おうとせず、他の選手より少し危なっかしい面があったが、大滝は器用だし、右手左手の区別なくドリブルができるし、ドリブルの技術に関してはまったく問題ない。しかし、二人に共通していることは、危ない部署はできるだけ引き受けなくてすむようにしたいという考えが抜けきっていないことだった。そんな二人がお互いにパートナーとなるのだから大変だ。特に副田は、毎日が地獄だというような顔をしていた。副田にとってはこの時期が、バスケット人生の中でもっともバスケットが嫌いになった時期だろう。

「教育や訓練というものは、叱ってばかりではダメだ。長所を見出し、それを誉めてやらなければ……」といつことばは、これまでにいよいよはと聞いてきた。「このことは初版でも書いたが、それは自分あまり手を汚さずに、机上論を振り回す教育評論家のことばだと、私は今でも思い続けている。生徒指導でも、スポーツ指導でも、どんなにひいき目に見ても何一つ長所が見あたらない生徒は必ずい

る。そんな生徒にも、「いいんだよ、君にはこんな長所があるんだから…」と嘘をついても、その気にさせなければいいのか？そうではないだろう。教育の原点は、自分の愚かさに気付かせることだろう。そして、気付いたら、それを少しでも改善しようと努力させることだろう。私はそれが教育の原点だと思う。愚かさをつき回し、いやというほど自分の愚かさを知らしめて、そこから脱出する努力をさせる。その努力の過程に一生懸命かかわってやる。それが教育とか指導というものではないのか？

十二 赤字

平成八年六月五日付 県下高校総合体育大会結果報告

【試合結果】 決勝戦 鶴鳴九八（前四六・後五二）ー（前三二・後三二）六三長崎商業

#氏名	学年	身長	出場時間	得点	備考
工藤	三年	一六〇	三七分	一〇	スタメン
大野	三年	一六〇	三四分	十九	スタメン
肘井	三年	一七五	三二分	二二	スタメン
浜本	三年	一七五	八分	二	
大滝	三年	一六九	三二分	二二	スタメン
岡	三年	一六六	七分	二	
副田	二年	一五九	三四分	十六	スタメン
浦松	二年	一六七	三分	二	
渡辺	二年	一七一	二分	〇	
井澤	一年	一六二	七分	〇	
森崎	一年	一六三	四分	三	

【試合感想】

今大会で最初に気が付いたことは、鶴鳴の選手と、他のチームの選手は、身体つきが違うし、足の運びが違うということでした。これまでは、県内の試合でさえも、鶴鳴の選手は、他のチームの選手と比べて華奢な感じがしていたのですが、今回は違いました。きっと、昨年二月から続けてきた筋力トレーニングの成果が現れたのだと思います。

一方、精神的にはまだまだ一人前ではないのかなあと思われる一面も見せられました。大会三日目。決勝リーグの一発目でひどい試合をしたのです。特に工藤がダメでした。それに呼応するかのようには滝が、最後まで腰を引いてプレーをしていました。鶴鳴の選手がこんなに乱れるのが悔しくて悔しくて、私はゲーム終了間際まで選手交替をせず、スタメンで戦い続けました。私が選手に話しかけたことは、ハーフタイムで、「赤字になったのを責めはしないが、赤字を最小限に食い止めて終われ」と、工藤に言った一言だけでした。

私は、ふてくされていたわけではありません。私は、工藤に全幅の信頼をおいています。その工藤がどうやってこの試合を締めくくめるのか、それをじつと観察していたのです。結局最後まで調子は戻らず、次の試合もまだ後遺症が残ったままでした。私は、「このチームにもこんなことが起こるんだなあ」と思いながら帰途につきました。しかし、今年のチームは、心身ともに、私のコーチ人生における最高傑作のチームだと思っていることに変わりはありません。なんとしても、今年のチームは全国大会でよい成績を収めさせてやりたいです。

各県の情報が入りました。熊本は、九州女学院が辛勝で優勝。福岡は、中村学園がやはり出てきたよ

うです。今大会は、デイフェンスに少し不満が残ったのでそこを手直します。そして、今月十五・十六の両日に、佐賀で行われる九州大会で優勝し、インターハイへの足がかりを作りたいと思っています。

【選手へのメッセージ】

高校総体という独特の雰囲気、少し心を乱されたのかねえ。三日目の試合はひどかった。しかし、自分の愚かさに気が付いた時、成長の第一歩が始まる」だからね。本番前でよかったよ。

私は工藤雅子に全幅の信頼を置いている。選手としてというより、人物に全幅の信頼を置いている。時々雅子は、私が気付いていないことを気付いているし、私が思いつかないようなことを考え出すし、私の経験と知識で見いだせなかったことを発見している場合がある。時には、私以上におとなで、私以上の知性を感じさせる場合がある。しかし、その知性も創造力も実践力も、ある年月をかけて磨き上げなければ本当の実力として定着しないというのか、今回の雅子は、「若さ」を露呈してしまった。普通の十八才の少女なら、未熟なのは当たり前だから、若さ故の失敗や愚かさをさらけ出すのだが、雅子にはそんなことばは無縁だという印象を持っていただけに、複雑な気持ちになった。

十三 ハナマル

平成八年六月十七日付 全九州高校総合体育大会結果報告

【試合結果】 準決勝 鶴鳴七五(前三九・後三六)ー(前二五・後三二)五七大津

決勝戦 鶴鳴七三(前三四・後三九)ー(前二七・後三九)六六小林

#氏名	学年	身長	準時間	準点	決時間	決点	備考
工藤	三年	一六〇	三五分	四	四〇分	九	スタメン
大野	三年	一六〇	三二分	十四	四〇分	八	スタメン
肘井	三年	一七五	三二分	二六	三八分	十八	スタメン
浜本	三年	一七五	五分	一	一分	〇	
大滝	三年	一六九	三六分	九	三九分	二五	スタメン
岡	三年	一六六	四分	〇	一分	〇	
副田	二年	一五九	三六分	十七	三八分	十三	スタメン
井澤	一年	一六二	九分	三	一分	〇	
森崎	一年	一六三	十二分	一	二分	〇	

【試合感想】

とにかく優勝したい大会でした。なぜなら、この大会で優勝すると、インターハイは第一シードになるからです。そして、念願通り優勝することができました。ほんとうに嬉しいです。春の九州大会でも優勝しているから当然だと思われるかも知れませんが、勝負の世界というのはそんなに単純なものではありません。どのチームにも、最後にたどり着くまでにはさまざまな事情が発生します。それをひとつひとつクリアしたチームが、チャンピオンになれるのです。準決勝で小林に負けた九州女学院にも、きつと何か事情があったに違いありません。

さて試合の出来ですが、決勝戦は、現在のチームになってから練習試合も含めて、最低の出来ではなかったかと思えます。小林高校の西田先生も、試合終了直後に、「先生、今日は鶴鳴の動きが悪かったですねえ」と言われました。しかし、なさけないなどとは思いません。今年のチームに、そんな感情を持つような出来事はもう起きないでしょう。ではなぜ、出来の悪い試合内容になったのかというと、それは準決勝の滑り出しがあまりにも完璧過ぎたので、その反動が決勝に出たのだと私は思っています。

決して、気のゆるみとか、油断から出たものではありません。機械が行う仕事ではなく、感情を持った人間が行う仕事というのはそんなものです。NBA第四戦の、マイケル・ジョーダンでさえあんなんですから。

しかも、そんなに動きが悪い状態でありながら、「このワンプレイは双方にとって非常に重要だぞ」という場面を、ことごとく、何らかのかたちで乗り切って、勝負をものにしたのは、鶴鳴の力が確実に向上したことを物語っていると私は思います。前回大差で勝ったチームにもたついたという不快感はありません。私の評価はハナマルです。インターハイもがんばります。

【選手へのメッセージ】ー準決勝ー
完璧だった。何も言うことないよ。

【選手へのメッセージ】ー決勝戦ー
立派ですよ。動きは確かに悪かったけど収支決算はちゃんと黒字を出したんだから。

十四 感動

平成八年八月一〇日付 インターハイ結果報告

【試合結果】 準決勝 鶴鳴七四(前三七・後三七)ー(前三七・後三二) 六八樟蔭東

決勝戦 名短七六(前四四・後三二)ー(前四〇・後二二) 六二鶴鳴

#氏名	学年	身長	準時間	準点	決時間	決点	備考
工藤	三年	一六〇	四〇分	三	四〇分	七	スタメン
大野	三年	一六〇	四〇分	二	二九分	一〇	スタメン
肘井	三年	一七五	四〇分	三五	四〇分	一〇	スタメン
大滝	三年	一六九	三九分	二〇	四〇分	二〇	スタメン
副田	二年	一五九	三五分	十四	四〇分	十五	スタメン
森崎	一年	一六三	六分	〇	十一分	〇	

【試合感想】

宿舎は忍野村の景勝庵。忍野八海の湧き水から流れ出た、二筋の小川に挟まれた静かな宿舎です。部屋の障子を開けると、目の前に富士山が、首が痛くなるほど見上げなければならない高さに見え、前を流れる小川には、やまめやいわなが泳いでいるのが見えます。商店や飲食店は日が落ちると店じまい。街も景色も宿舎も、試合に集中するには最高の環境でした。

鶴鳴は、第一シードなので初日は試合がありません。だから、気負って練習することもなからうと思いい、開会式が行われた八月一日は、選手を富士山五合目まで連れて行きました。五合目まではクルマで登れるんです。下山したあとは富士急ハイランドに行き、ギネスブックに載っていて、世界一の落差がある、フジヤマというジェットコースターに乗せました。選手はとても喜んでくれました。私…ですか？ 乗りませんよとんでもない。

さて、試合のことについて報告します。決勝戦の試合内容は、NHKで放映されたので試合の分析もデータの報告もしません。試合後、多くの方々からねぎらいのことはをかけられましたが、一番印象に残ったのは、県教育庁の野田体育指導監の一言でした。野田先生は、私がインタビュールの外で一息ついているところへ寄ってきて、「先生！よくやった！がんばったねえ！」と声をかけてくださいました。ことばはたったそれだけで、誰もが言う、ありきたりのことばですが、そのことばを最後まで言い終わらないうちに、野田先生の目に涙がいっぱい溜まってきました。

野田先生の涙は、これで国体の得点が期待できるとか、県の役員としても顔が立つとか、そんな損得勘定などまったくなく、ひたむきにがんばった選手たちの姿に、ただひたすら感激された涙だったと思います。だから逆に私も、野田先生の涙に感激し、「あの子たちほんとにがんばってくれました」と言ったりことが続かなくなり、会話がとぎれてしまいました。私は野田先生のことばと涙が、鶴鳴バスケットを見てくださった方々の気持ちのすべてを代弁してくれていると思います。

私たちは、「観衆が最後までかたずきをのんで見てくれるような試合をしよう」「訓練が人間をどれほど素晴らしいものに仕立て上げるかを見てもらおう」を合い言葉に、練習してきました。それも、悲壮感を漂わせた重苦しいものではなく、あくまで合理的な練習を土台として。それが一応達成されたので、とても嬉しいです。私自身も、自分のチームの選手に感動しましたし、よくここまで成長してくれたと誉めてやりたいと思います。

それは特に、決勝戦よりも準決勝の樟蔭東戦で強く感じました。平均身長七センチ差のハンディを跳ね返すべく、キャプテンの工藤がとった作戦は、始めからオールコートのゾーンプレス。それを四〇分間やり続け、相手がイヤになってミスを連発した、最後の三分間でとうとう勝利をものにしたのです。試合時間残り一分。コートの中央で大滝がうずくまってしまいました。ふとももの前後両面がけいれんして身動きできなくなったのです。この時は勝負が見えていたので、大滝と一年生の森崎を交替させました。そして、試合終了のブザーと同時に、今度は大滝が大滝と同じようにふともものけいれんでうずくまったまま身動きできません。それほど激しく動き、終わった時は選手全員が、持てる力を全て出し尽くして燃料切れになるほどがんばった試合でした。

しかし、「よくやった」と誉めてやる一方で、私の頭はクールに現状を分析しています。決してインターハイの善戦に酔いしれてはいません。「あの駒でよくここまで戦ったねえ」というみなさんの評価は有り難く受けますが、二位にしかなれなかったという自己評価も忘れてはいません。このインターハイでの収穫は、「このメンバーでも名短は決まわしに手が届かない相手ではなかった」という手応えを得たことです。その収穫をもとに、私の仕事はまたこれから始まります。それは、このメンバーで、国体で名短に深手を負け、選抜大会で致命傷を負わせることです。そうすることによって、全国のおちこちで、「よし、俺もがんばろう」と思っ立っコーチが増えるでしょう。私が一番嬉しいのはそのことです。そういうコーチがひとりでも増えるように、これからもがんばり続けたいと思います。

七月二三日に長崎を発ってから、八月九日に帰ってくるまで、様々なことがありました。ひとくちメモで報告します。

八月一日。開会式不参加組の八人は富士山に登り、世界一のジェットコースターに乗りました。この日の富士登山は、雲の中に飛び込んだようで、辺りは何も見えず、ただ寒いだけでした。森崎は高所恐怖症なのでフジヤマには乗らず、下から応援するだけでした。しかし練習ではがんばって六番目に起用されるまでに成長しました。

八月二日。大滝が、朝から頭痛と吐き気に襲われて食事が摂れません。この日は練習にも参加せず、終日休養。翌日は、試合には出場しましたが不調。長期の遠征は試合の相手だけが敵ではありません。八月五日。副田は、準々決勝の札幌山の手戦で捻挫しました。でも、その足で再逆転のスリーポイントシュートを決めたのはさすがです。しかし、準決勝と決勝は足が重そうでした。

八月六日。開会式参加組の六人を、準決勝戦終了後、富士登山とジェットコースター乗りに連れってきました。この日の富士山は、よく晴れていて五合目からすぐ目の前に富士山の頂上が見えました。その日は報道陣も取材合戦。長崎ナンバーの鶴鳴バスが、NHKテレビの全国版で放映されました。

やっぱり富士山は高いですよー。

【選手へのメッセージ】ー準決勝ー

すばらしい試合だった。頭のとっぺんからつまさきまで、全身を武器にして戦いを挑み続けたみんなの姿勢に、私自身が感動した。ほんとによくやった。ほかのことが見つからない。

【選手へのメッセージ】ー決勝戦ー

「観客を釘付けにする試合をしよう」「全国のコーチや選手に、夢を持たせる試合をしよう」という私たちの思いは、今大会で達成された。あとは、残る国体と選抜大会のどちらかでチャンピオンになるとだ。

追伸

「試合で優勝したのは私たちだけど、バスケットの内容で優勝したのは鶴鳴ですよ」

これは名短の井上監督が、インタビューで言ったことばです。勝って奢らず、名監督の口から出ることはさすがに凡人とは違います。

報告書のとおりすばらしい試合だった。感動した。しかし、ここまでの道のりが順風満帆だったわけではない。一年半前の新人戦の時は、「眉剃り事件」で私が激怒し、試合はめっちゃめっちゃになった。それから約三ヶ月後の九州大会では、中村学園にまるでこども扱いされてみじめに負けた。雅子と慎子がいよいよ上級生になり、最後の仕上げの年になったが、あの哲学者みたいな雅子がスランプに陥った。そして、今大会直前にはまたやっかいな出来事が起きた。恥をさらすことになるがその話をしよう。

それは運動部の寮での出来事だった。運動部の寮は、バスケット部、バドミントン部、新体操部、バレーボール部、柔道部、陸上部など、強化部に所属している選手の遠隔地通学者のための施設である。

そこには強化部の選手だけでなく、離島や遠隔地から来ている一般の生徒も含め、合計四〇人ぐらいの生徒が住んでいる。夏休みに入る直前に、その寮で、ある生徒が引き起こしたトラブルが発生した。それは簡単な処理ではなく、徹底的に真相を究明しなければならぬ出来事だった。そのために、トラブルに関わった当事者だけでなく、他の寮生にもいろいろ事情を聞かなければならなかった。その時、寮生のひとりひとりに無記名で書かせた報告書は、寮生の実態を知るのに非常に参考になった。

寮生を全員集めて、「ほかに困っていることはないか？」と聞いても、本当のことを答えてはくれない。ひとりひとり呼んで、一対一で話すと少しだけ口を開いてくれる。しかし、無記名の報告書となるほとんどの寮生が、現実そのままを書いてくれる。みんなが暮らしやすくなるための意見を述べるのだから、本当は正義を貫くことなのだが、「喋る」となるとどうしても、俗に言う「チクる」という行為としてとらえてしまのだろう。同じ屋根の下で暮らしている仲間を、「チクッた」と思われる行為はしたくないのだ。それが、無記名で書くとなると、「チクる」という感覚が抑えられ、正義を貫くという気持ちで書けるのである。その報告書を丹念に読んでいくと、私を激怒させる寮生活の実態が明らかになった。

寮生活には寮そのものの規則、例えば門限は九時半、入浴は九時まで、電話使用は一〇時半まで、他の寮生の部屋に泊まってはいけないなど、いくつかの取り決めがある。その他に、寮生だけの約束事項もある。例えば廊下や洗面所など、共同使用の場所は、部屋別に当番を決めて掃除する、電話使用は一回五分以内とする、ラジカセはイヤホンで聞く、などである。さらに、ドアの開閉は静かに、廊下を歩くスリッパの音は静かに、物や金銭の貸し借りはしないなど、規則でも約束でもないが、共同生活をすすめる上でのマナーがある。

私を激怒させた出来事とは、バスケット部員の中に、しかも上級生の中に、約束事項違反やマナー違反を再々犯している選手がいるということを、報告書で知ったことであった。インターハイ直前だった

が私はその選手を殴った。しかし、殴ってもむなしさだけが増幅し、怒りは静まらなかった。

私の自慢のひとつは、チーム内に無意味な上下関係を作らせないことである。それは、人間関係の問題で、選手たちにイヤな思いをさせたくないからである。だから、バスケット部の上級生は常に、模範生でなければならぬ。バスケット部の上級生たちは、代々それを伝統的に守ってきていると私は思っていた（実際は、ほとんど全員が伝統的にそれを守っているのだが）。それなのに、私の視野に入らないところで、それを破っている上級生がいたということを、私は許せなかった。

女子寮だから私は玄関から先に入ることとはほとんどない。だから、寮内の廊下がどれくらい汚れているかとか、生活実態がどのようなものかというのは知らない。寮はいわば、治外法権区域なのだ。それをたてにとつて、私がつとも大事にしていることを無視した寮生活をしているその選手が、私は絶対に許せなかった。インターハイ直前であるうが何であるうが、私はかまわなかった。殴ったためにクビになつてもいいと思つた。その日の練習に入る前、雅子が私につかつかと近づいてきて言った。

「先生、絶対に辞めさせないでくださいよ」

「あいつを？……インターハイ直前だもん、やめさせやしないよ」

雅子の方が冷静で、私の性格をしつかり把握していた。私は、雅子の前では平静を装つてそう言ったが実は雅子のことばで冷静さを取り戻させられ、「こんなことでインターハイをフイにしてたまるもんか」と思つたのである。

裏話の第二話はインターハイの宿舎で起きた出来事である。初日の朝、私は洗面所にみんなを集めて言った。

「見る、この洗面台を！」

みんなが使つた後の洗面台は、水があちこち飛び散つてびしょびしょだった。髪の毛も一二本落ちていた。後から使う人は気持ちわるい。私は、水を飛び散らせないように使えと言いたかつたのではない。大勢の人間が使えばどうしてもそうなる。だから、そこに、チームの古タオルか何かを置いておき洗面をする度に周りを拭いて部屋に戻ればいい。そうすると、洗面台はいつもピカピカしていて気持ちよく使える。そう言いたかつたのである。

「それくらいのが回らないバカなやつらが集まつたチームで、インターハイが乗り切れるか！」
インターハイ初日の朝は、こうして私の大喝で幕を開けたのである。

十五 沖繩

平成八年八月二〇日付 九州国体結果報告

【試合結果】 決勝戦 福岡七〇（前二四・後三七・延九）ー（前二八・後三三・延六）六七長崎

#氏名 所属 学年 身長 出場時間 得点 備考

工藤 鶴鳴 三年 一六〇 三八分 九 スタメン

大野 鶴鳴 三年 一六〇 四〇分 四 スタメン

肘井 鶴鳴 三年 一七五 四〇分 二〇 スタメン

大滝 鶴鳴 三年 一六九 三六分 十四 スタメン

弓 純心 三年 一六九 十一分 九

杉尾 商業 三年 一五九 二分 〇

副田 鶴鳴 二年 一五九 三二分 九 スタメン

森崎 鶴鳴 一年 一六三 二分 二

【試合感想】

負けた日の夜は一睡もしていません。ベッドに入って眠ろうと努力するのですが、福岡戦の情景が目の前から消えないのです。それほど悔しく、忘れられない試合でした。なぜ悔しいかという点、勝っている試合を負けにしまったからです。

工藤がとった作戦は、相手がビッグマンを三人スターターに使うならばゾーンプレス、ビッグマンがふたりならば、ハーフコートのマッチアップゾーンでした。それは見事に成功しました。ところが、後半一〇分過ぎあたりからドラウト（得点が止まったまま時間が経過すること）に陥り、十一点の貯金がバタバタとなくなつて、残り四分で六点差まで追い上げられたのです。でも、そのようなことは過去に何度も経験していますしめずらしいことではありません。しかも、次の攻撃を福岡が失敗したので、ここでこちらがしつかり攻撃を組み立て、それを成功させれば勝負は決まると私は判断しました。

しかし次の攻撃は、私の思いに反して、タイミングの早いシュートを打ってしまい、それが落ちてリバウンドボールを取られ、速攻を出されてしまいました。その速攻で二点取られてもまだ四点リードしているのですが、試合の様相は、それをきっかけにして福岡ペースになってしまいました。そうなる混成チームの弱点が出てきます。長崎の歯車は噛み合わなくなり、残り四分でこちらが二点しか取れない間に福岡に八点も取られ、延長戦に引きずり込まれました。そして、延長戦でもそのリズムは戻らず、三点差で負けてしまいました。

福岡は、中村学園・筑紫女学院・福岡第一・九州女子・東海第五から優秀選手を選抜し、インターハイのベスト四に匹敵する力を持ったチームに変身していました。しかし、相手がどんなに上手でも、なんとかして接戦に持ち込むか、瀬戸際を踏ん張って勝利を導くのが私たちのバスケットです。それなのに今回は、完全な勝ちゲームを持って行かれてしまったのです。悔しい。ほんとに悔しいです。でも、選手はいつも通り一生懸命戦ってくれました。これが国体の選抜チームではなかったら、こんなことは起きなかつたでしょう。国体の選抜チームになると、選手層は確かに厚くなります。しかし、試合運びとなると、高校の部は成年の部のようにうまくはいきませんが、今回の早撃ちシュートは、補強選手が打ってしまったのですが、それを打った選手が悪いのではなく、また選抜メンバーの決め方に問題があったわけでもありません。選抜チームだからこそ起こりうるケースが、たまたま起こっただけです。また、八月下旬に長崎で開催される日韓中ジュニア親善大会と、一〇月の広島国体めざしてがんばります。

追伸

浜本は、インターハイの帰りに、激しい腹痛と下痢に見舞われました。下痢は血便でした。その後、検査のために練習を停止させられ、今回の九州国体は欠場しました。しかし、検査の結果〇157（当時流行した伝染性の食中毒）ではありませんでした。

国内の試合は、どんなに遠距離でも、私は自分で運転するマイクロバスで遠征するということを、前に述べた。ところが沖縄だけはだめだ。飛行機で行かなければならないし、それも、自分で勝手に予約するわけにはいかない。本土と沖縄を結ぶ航空路線が限られているから、私たちは長崎空港から出発しようと思つていても、事務局からは「鶴鳴は福岡空港から発つてください」と指定される。沖縄は、遠征するには不便な場所なのである。こんなところは現地に着いてからも困る。交通手段の手配がやっかいなのである。ところが今回の沖縄遠征は楽だった。豊見城南高校の渡慶次先生と、前原高校の上間先生が、マイクロバスを貸してくれたからである。しかし報告書に示すとおり、試合はさんさんだった。おまけに悪いときには悪いことが重なるもので、その翌朝に事件が起きた。

帰りの飛行機は、早朝出発の長崎行きに指定され、翌朝六時半にはタクシーでホテルを発ち、那覇空港に向かわなければならぬ。だから前夜のうちにタクシーを予約した。私はほとんど寝ていないので、

六時にはロビーに下りてぼんやりしていた。通常、指定時刻の一〇分くらい前にはボチボチ選手が集まり始める。しかし今回は一人も下りて来ない。五分待った。まだ誰も下りて来ない。もしやと思って私はマネージャーの部屋に電話を入れた。寝ぼけた声でマネージャーが電話に出た。

「寝てたのか？」

「はい」

「タクシーは六時半だぞ」

「アッ……」

「急げ！」

予約した時間より五分くらい遅れてタクシーに乗り込んだ。選手が寝坊したために出発が遅れたなんて、前代未聞のことである。しかも、人物としては歴代最高級の選手がいるこのチームで。当然私は不機嫌になる。というより、怒髪天を抜くという状態である。空港でひととおりの手続きを終えたあと、私は選手を集めて言った。

「選手が寝坊したので遅れたなんて、過去、どんな弱いチームの時にもなかった。だがな、よく考えて見る。インターハイからの連戦による疲れと、夏の試合のコンディション作りには最悪の場所沖縄での試合のために、試合に出た選手たちの身体は、鉛のように重そうだしボロボロだ。マネージャーをはじめ、試合にまったく出ていない選手やほんの数分しか出ていない選手は、それを見て、『ひよつとしたらみんな疲れて、朝起きられないかも知れないから、私たちが少し早く起きてみんなを起こしてやる』という思いやりを持ってやって当然じゃないのか。試合で奮闘して疲れ切った選手が、それ以外のことも一切先頭に立ってやらなければならないなんて、そんなバカなことがあるか！」

今年のチームは、私のコーチ人生の中で、二度と創ることのできない好チームだと思う。しかしそれは、チーム全員がそれぞれの持ち場において完璧なのではなく、ほんの数人の優れた人物によって支えられているのだ。それほど組織を創るとするのは難しい。

十六 三国対抗

平成八年九月二日付 日韓中ジュニア親善大会結果報告

【試合結果】 韓国戦 崇義八二(前三八・後四四)ー(前三九・後二五)六四長崎

#氏名	所属	学年	身長	出場時間	得点	備考
工藤	鶴鳴	三年	一六〇	三六分	二	スタメン
大野	鶴鳴	三年	一六〇	三六分	七	スタメン
肘井	鶴鳴	三年	一七五	四〇分	十一	スタメン
大滝	鶴鳴	三年	一六九	三九分	二〇	スタメン
弓	純心	三年	一六九	八分	六	
杉尾	商業	三年	一五九	六分	五	
副田	鶴鳴	二年	一五九	三五分	十三	スタメン

【試合感想】

今年の中国代表は、サイズは韓国と同じくらいでしたが弱いチームでした。どこかの省のチャンピオンでしょう。全国チャンピオンではないようです。韓国代表は、チャンピオンチームの崇義高校でした。日本代表は名短です。男子は、韓国代表が全国チャンピオンの微分高校。日本代表は、能代工業がアジアジュニア大会の合宿で出場できず、二位の洛南高校が出場しました。

私の予想では、女子のランクは崇義・名短・長崎の順だろうと思っていたのですが、接戦の末、最後に名短が抜け出して崇義を破り、二勝〇敗で一位になりました。崇義の李コーチは、審判の判定に不満を漏らしていましたが、私の目では、勝敗を左右するほどの判定ミスや、愛国心ジャッジはなかったと思います。崇義と長崎の試合は、名短と崇義とは違った意味でももしろい試合でした。なにしろ長崎は、超小粒チーム。対する崇義は、一九五センチのツインタワーを擁して、スタメンの平均身長が一八四センチ。長崎のスタメンよりも二〇センチ上回ります。

前半、長崎のマツチアップゾーンが成功しました。センターへのパスをスティールされたり、長崎の動きに翻弄されたパスミスなどで、崇義は攻撃のリズムがつかめません。一方崇義のデイフェンスは、長崎の動きを止めることができず、マンツーマンからゾーンに切り替えたりしましたが効果なし。前半は長崎が一点のリードで折り返しました。しかし後半がいけません。疲れが出て長崎の動きが一瞬遅れがちになると、ポストの一九五センチにパスが渡ります。そうなると崇義が二点取るのは確実だし、もしシュートが落ちてても、リバウンドショットは絶対有利ですから差は開く一方です。結局十八点差で負けました。

インターハイからこっち、負けても、「いいチームですねえ」と言われます。でも、そのことばにすなおに「ありがとうございます」と言えたのは、インターハイまでです。最近はそのを聞くたびにムカムカします。もうクーベルタンの時代ではありません。九月一日まで充電のために休養。その後、国体に向けて全力投球します。

【選手へのメッセージ】

九州国体同様、勝てる試合をこれぞふたつ落としたよ。原因は後半のドラウトだ。インターハイと九州国体の後の疲れ？それは確かにあるだろう。しかしそれをいいわけにしているのは次の国体も落とすよ。個人としてもチームとしてもそれを切り抜ける努力をして国体に臨もう。

後半のドラウト。その原因はわかっている。疲労だ。報告書の中には「そんなことをいいわけにしているのは次の国体も落とすよ」と言っている。が、本音は、この疲れを何とかしなければならぬと思っていた。しかし次から次と試合があり、しかもそこに強いから必ず最終日まで駒を進める。最終日まで駒を進めるには強豪と対戦しなければならない。強豪チームとの対戦では、バックアップの選手を使うほど余裕はない。必然的に、スタメンの五人には、大会を消化する度に加速度的に疲労が溜まっていくのである。この状態は、次の選抜大会県予選でも同じだった。しかも私は、県内の試合なので大差で勝つにもかかわらず、何かいい材料を捜したいからスタメンを変えずに使った。これならいけるという何かを確かめたいのだ。それがたぶん、選手への負担に一層拍車をかける結果になったのだと思う。

十七 息切れ

平成八年九月二四日付 全国選抜大会長崎県予選結果報告

【試合結果】決勝戦 鶴鳴九四（前五二・後四二）ー（前二六・後二五）五一純心

#氏名	学年	身長	出場時間	得点	備考
工藤	三年	一六〇	四〇分	六	スタメン
大野	三年	一六〇	四〇分	三〇	スタメン
肘井	三年	一七五	四〇分	二四	スタメン
大滝	三年	一六九	四〇分	十四	スタメン
副田	二年	一五九	四〇分	二〇	スタメン

【試合感想】

インターハイ以後、いいゲームがひとつもありません。八月の中旬に九州国体で三試合、同じく八月下旬に日韓中親善大会で二試合、九月中旬に福井遠征で五試合、そして今回三試合と、公式戦と強化試合を織り交せて十三試合ほどやりました。しかしどの試合も、四〇分通してコンスタントに調子を維持することができないのです。

それも、決まったパターンがあるのではなく、滑り出し好調と思えば、後半がサッパリだめだったり、前半もたまたましているかと思えば、後半は別人のように動きがよくなるなど、さまざまです。選手は常に一生懸命やってくれているのですが、ゲームの様相がそうなってしまいます。

私は、インターハイの準決勝戦を、国体と選抜大会でもう一度再現させたいと思っています。インターハイの時は、全試合好調で乗り切ったものではありません。大会四日目の札幌山の手戦はひどい出来でした。にもかかわらず、翌日の準決勝戦ではあんなに立派な試合ができたのです。しかし、この十三試合ではそれが一度も再現できません。不調のままその日が終わり、不調のままその大会が終わってしまいます。

臨時休養も与えました。練習メニューも変えてみました。でもなかなか抜け出せません。ひとつにはスタミナの問題かなと思っています。あれだけ激しく動くバスケットですから、四〇分間のどこかでは疲れが出るでしょう。でも、「しょうがないよね」と慰めていたのでは国体も選抜もただの県代表になってしまいますから、何か手を打たなければなりません。九月になってからずっと考えていたのですが、毎日精一杯頑張っている選手に対して、苛酷とは思いますが、少し遠ざかっていたグラウンドでのインターバルトレーニングを復活させようかなと思っています。

【選手へのメッセージ】

勝てない。これでは全国レベルの試合でベスト四は無理だ。

十八 満身創痍

平成八年一〇月十七日付 広島国体結果報告

【試合結果】

準々決勝 長崎七六(前三九・後三七)ー(前二九・後三六)六五福井
準決勝 愛知九〇(前四六・後四四)ー(前二八・後三一)五九長崎

#氏名	所属	学年	身長	準々時間	準々点	準決時間	準決点	備考
工藤	鶴鳴	三年	一六〇	三六分	十三	三六分	七	スタメン
大野	鶴鳴	三年	一六〇	三九分	六	三九分	十六	スタメン
肘井	鶴鳴	三年	一七五	二八分	二四	二二分	二	
浜本	鶴鳴	三年	一七五	十五分	二	二四分	五	スタメン
大滝	鶴鳴	三年	一六九	三八分	十三	四〇分	二〇	スタメン
杉尾	商業	三年	一五九	七分	〇	〇分	〇	
副田	鶴鳴	二年	一五九	三二分	十四	三三分	八	スタメン
森崎	鶴鳴	一年	一六四	六分	四	六分	一	

【試合感想】

準決勝戦は滑り出し互角。それが約一〇分続きました。しかし、十六対十五で長崎リードにもかかわらず、私はタイムアウトを請求しました。選手の動きに崩れの前兆が見えたからです。それから約二分間はリードしたまま。しかし、危惧された事態はすぐにやってきました。二〇対十九で長崎リードの状

態から、長崎が四分かけてやっと二点取る間に、愛知は一〇点奪取。さらに三分かけて長崎が二点取る間に、愛知は八点追加。この時点でボクシングならタオルです。しかし、バスケットボールの試合にタオルはありません。この後は、差が開く一方だとわかりきっている試合を、続けなければならなかったのがとても辛かったです。ハーftimeの時、私は応援席に陣取っている県教委の方々のところへ出かけて行ってこう言いました。「申しわけありませんが、選手にこれ以上がんばれとは言えません」それだけ言うところみ上げてきてあととはことばが出ませんでした。

選手のコンディションは心身ともに最悪でした。これは、選手の不摂生や、練習のやり過ぎや、練習不足から起きたことではありません。インターハイ以後の過密スケジュールによるものです。その点を充分考慮に入れて調整してきたつもりでしたがダメでした。おまけに、大会間近になって工藤と肘井に故障発生。肘井は、ほぼ完治して大会に臨みましたがインターハイで見たようなバネはありません。工藤に至っては、出発前日にほんの三分ぐらいチーム練習に参加しただけで、国体はぶつつけ本番。「名短を倒します」と豪語するには名短に失礼な状態でした。申し訳ないのは、純心と長崎商業からお手伝いをいただきながら、本隊の鶴鳴が本調子ではなかったことです。紙面を借りてお詫びいたします。さて、鶴鳴の監督として一言申し上げます。

取材陣やバスケット関係者からことばをいただく度に、「やってくださいよ」という期待が込められているのが痛いほどわかります。その期待に、年末の選抜大会で見事に応えたいと思っっています。これから約一ヶ月。工藤・大野・肘井・大滝をオフにします。心身ともにリフレッシュさせ、残り一ヶ月の練習にすべてを賭けます。

【選手へのメッセージ】
ハル鷺足炎、エル筋断裂。ポロポロだ。仕方ないよ。休養して出直そう。

なんとか上昇気流に乗せたいと思い、夏休み以後、休養を入れたり、練習メニューを変えたりしながら調整を図ってきた。報告書では、練習のやり過ぎでも、練習不足でもないと言っているが、本当は、もっと早く、思い切って長期の休養を与えてやるのが正しかった。雅子の鷺足（太股の裏側の筋肉の内側で膝に近い部分）炎や肘井の筋断裂、このような傷害の原因は、大半がオーバーワークである。自分では充分休ませたつもりでいる。しかし、気持ちだけは休養させたりもりで、実際は復調の兆しを見ただけのために選手を使い過ぎていたのだ。焦っていた私には、当時自分をチェックする余裕はなかった。

十九 アンコール

平成八年十二月三〇日付 ウィンターカップ大会結果報告

【試合結果】三回戦 東京成徳七一（前三二・後三九）ー（前三七・後二七）六四鶴鳴

#氏名 学年 身長 出場時間 得点 備考

工藤	三年	一六〇	三九分	八	スタメン
大野	三年	一六〇	四〇分	六	スタメン
肘井	三年	一七五	四〇分	十九	スタメン
浜本	三年	一七五	九分	〇	
大滝	三年	一六九	三七分	十八	スタメン
井澤	一年	一五九	三五分	十三	スタメン

【試合感想】

工藤二七七、大野七八〇、肘井三〇四〇、浜本七二六、大滝四一〇、副田一四一、井澤六九四、森崎

一九九。この数字は、九月二七日の医科学測定でのCPKの値です。CPKとはクレアチンフォスフォキナーゼの略で、筋細胞が破壊された時に、血液中に出てくる酵素のことです。この数値が高いということは、筋肉を酷使して筋細胞が破壊され、疲労が蓄積していることを意味します。この数値の正常範囲は二〇〇以内です。三年生は全員二〇〇を越えています。というところは、この直後に行われた国体は疲労のピークに達していたことを示しています。肘井の値が異常に高くなっているのは、筋断裂を起こしていたのでそうなったのでしょう。私がこの報告を受けたのは十一月に入ってからですが、その時はすでに三年生には一ヶ月の休養をとらせている最中でした。

練習再開は十一月十九日です。しかしなかなか調子が上がりません。二週過ぎ、三週過ぎてもまだだめです。出発一週間前になってようやく動きがシャープになってきました。選手もそれは感じていきます。おまけに、気がかりだった副田の欠場は、一年生の井澤が、副田の穴を充分埋めるまでに急成長し、何の憂いもなく充実した気持ちで長崎を出発しました。そして、チームの調子のよさは、初戦の広島皆実の時に選手も私も感じました。正直に申しますと初日を終わった段階で私は、インターハイの再現を頭に描きました。が、結果はご存知のとおりです。

試合を見ていない方のために、三回戦の東京成徳との試合の流れを解説します。立ち上がりから動きもプレイの内容も圧倒的に優勢でした。一〇分過ぎには二四対一二とダブルスコアになりました。前半残り五分の時点で鶴鳴は三五得点。これは得点ペースとしても、前半で四五点から五〇点のペースです。ところが、その後の五分間で鶴鳴はわずか二点しか取れずに前半を終わったのです。きっかけは、一本のターンオーバーでした。そのターンオーバーとは、ドリブル攻撃のやり過ぎから、インサイドへ狙ったパスがインターセプトされたプレイです。その時点ではまだ充分リードしていたのですが、私はすかさずタイムアウトを請求し、パッシングとムービングからの崩しを再確認しました。しかし、タイムアウトの後もプレイのリズムは戻らず、そのあとまた同じプレイが出たのです。これも相手の速攻につながりました。もうタイムアウトは残っていません。それでも滑り出しの貯金があるので、前半は五点リードで終了しました。

後半に備えて、私はもちろん、前半のふたつのターンオーバーのことはチェックしました。選手はそのことをしっかり理解してコートに出ました。しかし、前半途中から挽回してきた東京成徳は、堅さがとれ、思い切ったステイルとショットブロックを狙い、オフェンスでは、一八三センチの小岩にボールを集め、インサイドとアウトサイドの合わせで積極的に攻撃を仕掛けます。試合はこうして完全に成徳ペースのまま進み、鶴鳴はそれをひっくり返せないままとうとう試合終了のピストルを聞くことになってしまいました。

数日経ってこうして振り返ってみると、あのような試合展開になった時、結局五人全員の動きでしか攻撃できないチームの弱さが出てしまったのかなあと思うようになりました。どんなに強いチームでも途中で動きがちぐはぐになったりすることがあります。調子が悪い日があります。そんな時、ブルズではジョーダンが一对一をやります。他のチームでも、ほとんどと言っていいほどビッグセンターにボールを入れ、その関連プレーで何とか点を取ろうとします。そう考えると、昨年と今年展開した鶴鳴バスケットは、見る人にとってはおもしろいバスケットだし、昨年は国体で二位、今年はインターハイで二位と、二年連続決勝戦まで駒を進めはしたものの、やっぱり、二位にはなても優勝はできないバスケットなのかなあと深刻に考えてしまいます。

ですが、「勝つためにはやっぱり松山や浜口（平成三年インターハイ優勝時のツインタワー）みたいな選手をどこからか引っ張ってこなければだめだ」とは言いたくありません。そんな選手をリクルートできなくても、普通の選手を訓練することによって、全国優勝できるバスケットを完成させたいという

思いを持ち続けていきたいと思います。私が六〇才になるまでにインターハイと選抜があと六回ずつ挑戦できます。この十二回のうち、一回はそのようなバスケットで優勝したいと思います。

全国の指導者のみなさんから、期待と願いを込められたことはをたくさんいただきました。それに応えられなかったのはとても悲しいのですが、それほど想ってもらったのだと思うとまた勇気が湧いてきます。またがんばります。あと六年。

【選手へのメッセージ】

インターハイで県民に希望と活力を与え、今回は県民をすっかりさせた。しかしどちらも鶴鳴の真の姿。それを素直に受け止め、次のステップにしよう。ごころうさま。ありがとう。

話を二ヶ月前に戻そう。

毎年、協会のスケデュールでは、国体から帰ったらすぐ新チームの地区新人戦が行われることになっている。この時期は、下級生ながら主力として活躍している選手は大変だ。身体的には直前の国体で一杯頑張った挙げ句、その直後には新チームのリーダーとして、精神的な面でもがんばらなければならぬ。その役目を負わなければならないのが、今年は副田だった一人しかいないのである。しかも、来年の鶴鳴はガタ落ちだねえ」と周囲の人々のささやいている声が、副田の耳にも聞こえているので、副田の両肩にはずっしりとその重責がのしかかっている。

疲労困憊の身体を引きずって、副田は懸命にチームを引っ張り、新チームの優勝は純心だという下馬評を覆して鶴鳴の新チームを優勝に導いた。しかし、副田は試合の途中で膝を傷めている。試合後少しピッコを引いているので私は副田に尋ねた。

「おまえ、どうしたんだ？」

「前半の中頃、シュートを決めてディフェンスに戻る途中、身体の向きを変えた瞬間にピリツと膝に痛みを感じました。でもしばらくしたらよくなりました」

副田は、それまでの捻挫や打撲に比べるとたいした痛みでもなかったもので、そのままプレイを続けたのである。本人は、たいしたことはないと思っているので私に申告もしなかった。しかし私は、状況を聞いてドキツとした。膝の損傷の場合、受傷機転（どのような状態）でおおむね損傷の度合いはわかる。副田の報告からは、明らかに半月板損傷が疑われるのだ。半月板損傷は、痛みがひどいとか軽いつかたで損傷の有無や程度を測ることはできない。MRIで調べるか、それでもわからなければ、関節鏡で調べなければ本当のことはわからないのである。私は、すぐに知り合いの整形外科医に電話をして副田を診てもらった。

私の推測は当たっていた。診断名は、内側半月板バケツ柄状断裂。半月板中央部分が縦に、両端を残して裂けるタイプをそのように呼ぶ。関節鏡で診た結果、副田の半月板は円盤状（ディスクイッド）タイプであった。半月板というのは、普通は三日月型なのだが、彼女の半月板は丸型だったのである。このタイプは、欧米人には少ないが日本人には多い。凹んでいるはずのところが出っ張っているの、その上に乗っかっている大腿骨は当然安定性が悪い。だから、副田の膝はいずれ損傷を起こすタイプの膝であったのである。半月板損傷の治療は、最近では、メスを使って大きく切る手術はあまりせず、関節鏡でのぞきながらの鏡視下手術で間に合う。鏡視下手術だと、長くても入院は一〇日。選抜大会までは約二ヶ月あるからなんとか間に合う。私は、両親と本人に説明をしてすぐ手術をしてもらった。

副田は予定どおり一〇日で退院した。そして、十二月に入ってから少しずつ動き始めた。しかし少し動けば膝に水が溜まるし痛みもなかなか抜けない。そんな状態が選抜大会までずっと続いたので、副田を選抜大会に出場させることができなくなり、一年生の井澤を代役に立てて今年最後の重大なイベントを凌がなければならなくなった。弱り目に祟り目。富士の麓であればバスケットファンを感動させて

くれた風軍団は、こうして失速したままコートを去らなければならなくなった。「アンコール」。私自身がそう言いたい。しかし、このチームはもう帰って来ない。

二〇 卒業旅行

二月になって、沖縄の川野さんから電話がかかった。

「先生、三年生の卒業旅行というのはいらないんですか」

「え？ いえ… 考えていませんが」

三年生の卒業旅行などやったこともないし考えたこともない。最初は話がチンプンカンプンで、何のことかわからなかったが、しばらく話しているうちに川野さんの言いたいことは飲み込めた。

山梨インターハイと、その直後に沖縄で開催された九州国体を見て、川野さんをはじめとする前原高校の関係者が、一気に鶴鳴ファンになってしまったのである。そこで、鶴鳴のことをもつと知りたいたい、その年の正月休みに豊見城南高校と前原高校が鶴鳴に合宿に来た。そしてみんな大の仲良しになった。そんな経緯があつて、鶴鳴の選手が我が子のように可愛くなった川野さんは、もし私が卒業旅行という名目で、三年生を沖縄に派遣してくれたら、宿泊や食事は一切沖縄側で受け持つから、そのプランを考えて欲しいと私に提案したのである。

川野さんのプランは、鶴鳴の選手に沖縄の観光をさせてやりたいのと、地元チームの選手たちに、少しでもいいから、クリニックをしてもらいたいという一石二鳥の狙いを秘めていた。私は川野さんの意図を汲んで、それをすぐ実現させる方向に持っていった。期間は卒業式直前の約五日間。川野さんは遠慮がちにこのことを申し出たが、それはお金のことが引かかったからである。ホームステイと沖縄観光の費用は持てる。しかし、長崎から沖縄往復の航空運賃まで含めるとちょっと大変なのである。それは川野さんから言われなくてもわかったから、旅費はこちらで持ちますと言った。

風軍団は強かったから遠征が多かった。だからへそくりが溜まる。チームのへそくりは、通常、チーム強化のための遠征費や、公式試合のエントリー外選手の費用など、チーム全体のために使う。チームの中の数人のために、しかも、数人の慰安旅行のためになど使ったことは過去一度もない。しかし、何事にも特別措置や例外というのがある。私は今年の三年生の卒業旅行のために、へそくりを使うことに何のためらいもなかった。

私は、夏休み終盤の、日韓中三国対抗戦の報告書に次のように書いた。

「インターハイからこち、負けても、『いいチームですね』と言われる。でも、そのことには『すなおに』ありがとうでございます』と言えたのは、インターハイまでです。最近はそのを聞いたたびにムカムカします。もうクイベルタンの時代ではありません」

それは本音だった。しかし全てが終わったあと、「あいつらは二位にしかなれなかったつまらないチームだった」とは全然思っていない。すばらしいチームだったと思っっているし、あの子たちには勇気と感動を貰ったと今でも思っている。